パスカルの≪アポロジー≫のプラン復元に関して (XV)

竹　下　春　日

(162)——La. 310-Br. 288 について。この断章は，≪隠れた神≫ Dieu caché にかんするものである。ところで，11°《A. P. R.》は≪アポロジー≫の第二部のプランの résumé であるが（Ⅸ回の(五)参照），これに拠れば，宗教の証拠の提示——これは，擬人法による神の言葉中に暗示されている——の後に，隠れた神にかんする叙述が来ている。したがって隠れた神と内容的に直接関係を有する諸断章（Non classé）は，宗教の証拠を示す諸章（18°～26°）の後，すなわち 27° ≪結論≫Conclusion に属することになる。それゆえ本断章（La. 310）も，27° 章にぞくする。このことを証するものは，La. 310 中の≪三種の人が神を知っている。謙虚な心を持ち，高くとも低くとも，どの程度の精神を持とうと，へりくだることを愛する人々。あるいは，どんな反対に出会っても，真理を見るに足るだけの精神を持っている人々。≫と，27°の二断章（La. 931-Br. 286, La. 732-Br. 287）中の叙述との符合一致である。つまり，La. 310 の≪謙虚な心を持ち，……へりくだることを愛する人々。≫に照応するものを，われわれは La. 931 中の≪旧新約聖書を読まないで信じている人たちがあるというのは，彼らが全く清らかな心構えを持っていて，われわれの宗教について聞くことがそれにぴったりするからである。彼らは唯一の神が彼らをつくったのであると感じ，自分が神にまで達することはできず，もし神のほうが彼らのところまで来てくださるのでなければ，神との交わりは全く不可能であることを感じる。≫に見出すのである。また，La. 310 の≪真理を見るに足るだけの

精神を持っている人々。≫に符合するものを，われわれは，La. 732（27°）中の≪それ〔預言と証拠〕を知っている人たち≫が≪精神によって判断する≫と述べられていることに，見出すのである。かくして，隠れた神に連関する諸断章は，27°≪結論≫の章中に属するものであることが，分るのであるが，かかる諸断章としては，われわれは La. 310 のほかに，La. 315-Br. 557，La. 319-Br. 559 La. 453-Br. 559 bis，La. 724-Br. 518，La. 733-Br. 848，La. 734-Br. 584，La. 735-Br. 847，La. 736-Br. 564 を，指摘することができる。

以上において，われわれは Non classé の La. 310-Br. 288 と 11°《A. P. R.》および 27°《Conclusion》の三者が，内面的連関を持っている事実を知りうるのであり，而してこの事実こそは，11° が≪アポロジー≫第2部のプランの縮図たることを，保証するものであって，従来におけるわれわれの章順序にかんする推論の正しさを，裏附けるものにほかならないのである。

(163)——La. 311-Br. 478 について。この断章は，≪われわれが持って生まれたもの≫としての≪悪≫を，本質的な事柄として述べているので，15° bis ≪本性は堕落していること≫の章にぞくする。

(164)——La. 312-Br. 427 について。この断章は，La. 13-Br. 229 および La. 389-Br. -693(15°) と連関を持っている。次のごとき，叙述内容の照応一致が，見られるからである。≪人間はどんな地位に自分を置いたらいいのかを知らない。彼らは明らかに道に迷っているのであり，自分の本来の場所から落ちたまま，それを再び見いだせないでいる。彼はそれを，見通すことのできない暗黒のなかで，不安にかられて，いたるところに求めているが，成功しない≫(La. 312)——≪これこそ私が見ているものであり，私を悩ましているものである。私はあらゆる方を眺めるが，どこにもわからないものしか見えない。自然は私に，疑いと不安の種でないものは何もくれない。≫（La. 13)——≪人間の盲目と悲惨とを見，沈黙している全宇宙をながめるとき，人間がなんの光もなく，ひとり置き去りにされ，宇宙のこの一隅にさまよっているかのように，だれが自分をそこにおいたか，何をしにそこへ来たか，死んだらどうなるかも知らず，あらゆる認識を奪われているのを見るとき，私は，眠っているあいだに荒れ果てた恐ろしい島につれてこられ，さめてみると〔自分がどこにいるのか〕

わからず，そこからのがれ出る手段も知らない人のような，恐怖におそわれる。≫(La. 389)

ところで，最後の引用文は La. 389-Br. 693 中のものであり，この fr. は 15° ≪人間を知ることから神への移行≫ Transition de la connaissance de l'homme à Dieu の章にぞくしている。したがって，上出の三断章はすべて，同章（15°）に属するものと言える。

(165)——La. 313-Br. 477, 606 について。この fr. は，終りの方で次のごとく叙している——≪われわれの宗教以外のどんな宗教も，人間が罪のなかに生まれていることを教えなかった。哲学者たちのどんな学派も，そのことを言わなかった。だから，なにものも真実を語らなかった。／どんな学派も，宗教も地上に永存しなかった，キリスト教のほかには。≫（Br. 606）ところで，21° ≪永続性≫Perpétuité の章にぞくする La. 540-Br. 613 の最初の部分は，次のようである——≪永続性。／この宗教，すなわち人間は栄光の状態および神との交わりから，悲哀と悔恨と神からの離反との状態におちたが，そのような生活ののちに，来たるべきメシアによってふたたび元にかえされるであろうと信じるところに成り立つこの宗教は，常に地上に存在してきた。≫ かように両断章の述べるところは，人間の原罪とキリスト教の永続性とを説く点において，全く一致しているので，La. 313 は 21° に属すべきものである。

(166)——La. 314-Br. 199 について。この fr. は，12°≪始まり≫Commencement 中の La. 339-Br. 200 の叙述と，重要点で一致している。すなわち，両断章はともに，≪人間の状態≫la condition des hommes を宣告を受けた囚人の状態に喩えている点で，共通している。それゆえ，La. 314 は 12° の章にぞくする。

(167)——La. 315-Br. 557 について。この fr. は，27°≪結論≫にぞくする(162 参照)。

(168)——La. 316-Br. 558 について。この fr. は，次のごとくである——≪われわれのあらゆる不分明 (obscurités) から結論しうることは，われわれの無価値でなくして何であろうか。≫（強調点は論者）この叙述の内容は，La. 389-Br. 693(15°) の冒頭の部分や La. 390-Br. 72(15°) 中の叙述——≪さて，人間

は自分自身に立ち返り，存在しているものにくらべて，自分が何であるかを考えてみるがいい。そして自分を，この自然の辺鄙な片隅に迷い込んでいるもののようにみなし，彼がいま住んでいるこの小さな暗い牢獄，私は宇宙の意味で言っているのだが，そこから地球，もろもろの王国，もろもろの町，また自分自身をその正当な値において評価するのを学ぶがいい。／無限のなかにおいて，人間とはいったい何なのであろう。≫（強調点は論者）の主旨と，一致している。したがって，La. 316 は 15°≪人間を知ることから神への移行≫の章にぞくする。

(169)——La. 317-Br. 586 について。この fr. の最後の部分——≪……なぜなら，自分の悲惨を知らずに神を知ることも，神を知らずに自分の悲惨を知ることも，人間にとって等しく危険だからである。≫は，La. 383-Br. 527 中の≪自分の悲惨を知らずに神を知ることは，高慢を生みだす。／神を知らずに自分の悲惨を知ることは，絶望を生みだす。≫と，一致している。而して La. 383 は 14° ≪この神の証明方法の卓越性≫ Excellence de cette manière de prouver Dieu に属するから，La. 317 も，14° 章にぞくする。

(170)——La. 318-Br. 769 について。この fr. は，17°≪愛すべき宗教≫Religion aimabe にぞくする。なぜなら，この断章の主旨は，異教徒の救いはただイエスキリストの恩寵にのみあることを説くものであり，17° 中の La. 423-Br. 774 の≪「異邦人を照らす光」≫と照応しているからである。

(171)——La. 319-Br. 559 について。この断章の結論は，次のごとくである——≪……そこで神は存在するけれども，人は神を知るに値しないと結論するほかはない。≫この結論により，≪人は神を知るに値しない≫という人間自身についての知が得られ，しかも≪神は存在する≫以上，神の意思も無視しえないという神への志向が，発生せざるをえない状況となる。それゆえ，この fr. は，15°≪人間を知ることから神への移行≫の章中に属する。

(172)——La. 320-Br. 574 について。この fr. は，無信仰者に対する教導を内容とするものであるが，18°章の≪宗教の基礎と反論への回答≫Fondements de la religion et réponse aux objections も，同様のことを主旨としているので，この断章は同章（18°）にぞくすると，推定しうる。

次に，この断章の前半たる≪偉大。この宗教はじつに偉大なもである。だから，それが不分明であるとしたら，それをたずねるだけの労をとろうとしないものは，それ（宗教）をとりあげられるのが当然である。≫は，18° 章中の La. 443-Br. 578 の≪……選ばれた人々を照らすには十分な光があり，彼らをへりくだらせるには十分な暗さがある。見捨てられた人々を盲目にするには十分な暗さがあり，……≫と，――パスカルの立場から見て――内容の本質から言って，一致している。さらに，同断章（La. 320）の後半，≪この宗教は求めることによって見いだされるものであるとしたら，いったいなにを嘆くことがあろうか。(De quoi se plaint-on donc…?)≫は，18° 章中の La. 451-Br. 228 の≪無神論者たちの反論。／「だが，われわれには何の光もないのだ」≫と，明らかに照応している。なぜなら，パスカルの立場から言えば，≪無神論者たち≫に≪何の光もない≫のは当然である，彼らは≪求め≫ようとしていないのだから。以上により，La. 320 は，18° 章に所属するものと，言いうる。

(173)――La. 321-Br. 575 について。この fr. の主旨は，18°の La. 439-Br. 566, La. 443-Br. 578 と一致するので，18° 章にぞくする。

(174)――La. 322-Br. 202 は，パスカルの手で rayer されているので，省く。

(175)――La. 323-Br. 445 について。この fr. は，キリスト教の教義――≪原罪≫や≪愚かさ≫等――が，≪理性に反すること≫une chose contre la raison を説くものであり，その要旨は 13°≪理性の服従とその利用≫Soumission et usage de la raison のそれと一致している。就中同章中の La. 358-Br. 273, La. 373-Br. 267 の主旨と，照応一致している。したがって，同章（13°）に属する。

(176)――La. 324-Br. 857 について。この fr. は 19°≪表徴としての律法≫Loi figurative にぞくする。なぜなら，この fr. 中には≪明るさ≫clarté・≪暗さ≫obscurité・≪真理≫le vrai・≪しるし≫marques・≪教会≫une Eglise・≪偽なるもの≫faux の語が存在するが，これらに類似する語を全部包含するような章は，ただ一つ 19° 章のみであるからである――figures (La. 480-Br. 657), figuratives (La. 481-Br. 674), clairement・obscurément・claire・obscure (La. 489-Br. 758), Eglise・véritable・vrai・le vrai (La. 506-Br. 687),

signes (La. 504-Br. 670)〔これらは，すべて 19° 章にぞくしている〕。

(177)——La. 325-Br. 230 について。この fr. 中の≪神があるということは不可解であり，神がないということも不可解である。……原罪があるということも，原罪がないということも。≫における後半の部分（原罪にかんするもの）は，La. 323-Br. 445 中の≪原罪は，人間の目には愚かなものである。だが，それは愚かなものとして提供されている。だから，君たちはこの教理には道理がないといって，……≫（強調点は論者）と一致しており，しかも後者の断章は 13° 章に属するものであるから，La. 325 も同章（13°）に属することになる。

(178)——La. 343-Br. 233 について。これは有名な『賭』le Pari の断章であり，12°≪始まり≫Commencement 中の La. 329-Br. 238 および La. 330-Br. 237 と，確率計算という数学的発想の点で共通している。すなわち，12° 章中の両断章には，《le parti》(La. 329)，《Partis》(La. 330) なる語が見出されるが，La. 343 にも《ce parti》という語があり，確率計算の方法がこの断章の特色をなしていることは，すでに周知の事実である。したがって，La. 343 は 12° 章に属すべきものである。

(179)——La. 344-Br. 231 について。この fr. および La. 348-Br. 232 は，12°≪始まり≫の章にぞくする。その理由は，次のごとくである。まず La. 344 中には，≪神が無限であり，しかも部分を持たないということは不可能だと思うのか。——そうだ。——それなら，無限であり，しかも不可分のものを一つ君に見せてあげよう。それは，無限の速度であらゆるところを運動している一つの点である。……≫という叙述があるが，これは La. 348 の≪無限な運動，すべてを満たす一点，静止している運動量。量のない無限，不可分で無限。≫と，内容的に一致している。ところで，12°章にぞくすべき La. 343 (178参照) には，≪われわれは，無限が存在することを知っているが，その性質を知らない。……／このようにして，人は，神が何であるかを知らないでも，神があるということを知ることができる。……／しかしわれわれは，神の存在も性質も知らない。なぜなら，神には広がりも限界もないからである。≫という叙述が存在するが，前二断章は，これ (La. 343) を詳細化し，充実する意図を持った

ものと，推測しうる。それゆえ，La. 344 および La. 348 はともに 12° 章中のものであると，言いうる。

(180)——La. 345-Br. 203 について。この fr. は，次のごとくである——≪〈つまらぬものの魅力〉情念にじゃまされないために，一週間の生命しかないもののように行動しよう。≫ この断章の主旨に照応一致するものを，われわれは 12° 章の La. 330-Br. 237 において見出す——≪次のいろいろの仮定のどれに従うかによって，この世でそれぞれ違った生き方をしなければならない。……／五，この世に長くはいないことは確かで，一時間いられるかどうかも不確かである場合。／この最後の仮定こそ，われわれの場合である。≫ したがって，La. 345 は 12° 章にぞくすると，言いうる。

(181)——La. 346-Br. 234 について。この fr. は，≪確率決定の規則≫la règle des partis について触れているが，12°章の La. 330-Br. 236 も≪確率計算≫Partis なるタイトルを有するものであるから，La. 346 も 12° 章にぞくする。

(182)——La. 347-Br. 121 について。この fr. は，次のごとく述べている——≪自然は常に同じことを繰り返す。年，日，時。空間と同様。そして数は，互いに端と端とつながって続いている。こうして，一種の無限と永遠とができる。しかし，これらすべてのもののどれかに，無限や永遠のものがあるというわけではない。だが，それらの限られた存在が，無限に増加されていくのである。したがって，無限なのは，それらのものを増加させる数だけだと，私には思われる。≫ この断章中の無限とは，≪一種の無限≫une espèce d'infini であり，これは≪限られた存在≫ êtres terminés の不断の増加としての無限，≪数≫le nombre としての無限にほかならない。言い換えれば，これは——パスカルの立場から言えば——被造物の無限にすぎない。したがってパスカルはこれと対立的に，創造主自体の無限を考えているのであり，われわれはこれを 12° 中の諸断章に見出すのである（179 参照）。かくして La. 347 と 12° 中の諸断章（La. 343, La. 344）とは，緊密なる対照的ないし対立的関係を通じて，12° 章中に所属することになる。

(183)——La. 348-Br. 232 について。これについては，179 を参照のこと。

(184)——La. 349-Br. 239 について。この fr. は，構成上≪異論≫Objection と≪回答≫Réponse とから成り立っているので，同様のものをタイトルの一部として有する 18°《Fondements de la religion et réponse aux objections》にぞくする。

(185)——La. 350-Br. 240 について。この fr. の冒頭は，≪「もし私に信仰があったなら，まもなく快楽を捨てたことでしょう」と彼らは言う。≫となっているが，この文中の≪彼ら≫ils なるものは，文意全体から察するに，積極的にキリスト教を批判する無神論者ではなく，消極的にせよ信仰を持つことを望んでいる無信仰者と見られるが，同様の無信仰者ないし無神論者にかんする叙述が，12°≪始まり≫の章中に見出される——La. 332-Br. 190, La. 336-Br. 257。したがって，La. 350 は同章（12°）に属するものと見られる。

(186)——La. 351-Br. 262 について。この fr. は，26°≪キリスト教の道徳≫Morale chrétienne にぞくする。なぜなら，この断章の冒頭は≪迷信と邪欲。≫Snperstition, ——et concupiscence. となっており，26° に所属する La. 682-Br. 747 ter の末尾——《Superstition——Concupiscence.》と，明らかに対応しているからである。

(187)—La. 374-Br. 260 について。この fr. は，13° ≪理性の服従とその利用≫Soumission et usage de la raison に所属する。この fr. 中の≪あることを人から聞いたということが，君の信じる基準になってよいどころか，それをいまだ，かって聞いたことがないかのような状態に自分を置いた上でなければ，何も信じてはいけない。≫は，13° 中の La. 372-Br. 254 の≪あまり従順すぎるということで人々を責めなければならない場合も，珍しくない。≫（強調点は論者）と，要旨において照応一致しているので，叙上のごとく判定しうる。

(188)——La. 375-Br. 99 について。この fr. 中で，パスカルは，≪意志は，信仰のおもな器官の一つである。≫ La volonté est un des principaux organes de la créance. と述べているが，その理由は，≪……精神は，意志と一つになって進み，意志の好きなほうの面を眺めるために立ち止まる。このようにして精神は，そこで自分が見るところによって判断するのである。≫からである。

畢竟≪意志≫が≪精神≫ esprit を規定するのである。他方パスカルは，La. 396-Br. 245 で次のごとく述べている——≪信仰に三つの手段がある。理性と習慣と霊感とである。……だが，精神をその証拠に向かって開き，習慣によってそこに確立し，云々≫と。この場合≪確立する≫se confirmer とは，当然≪精神≫のみならずこれを左右する≪意志≫をも，習慣を通じて固めることでなければならない。なぜなら，≪意志は，信仰のおもな器官の一つである。≫からである。かくして≪信仰≫la créance の達成には，事実上意志・理性・習慣，霊感の四者が重要な役割を果すことが，理解される。

扨て La. 7-Br. 252 には，次の叙述が見出される——≪われわれはもっと容易な信仰，すなわち，習慣による信仰を獲得しなければならないのであって，それはわれわれを，無理強いなしに，技巧なしに，論議なしに物事を信じるようにさせ，われわれの全能力をそれに傾けさせ，そのようにしてわれわれの魂が自然にそこに落ち込むようにするのである。……われわれは二つの部分を信じさせなければならない。精神は，一生に一度見れば十分であるはずの理由によって信じさせ，自動機械〔身体〕は，習慣によって，そして反対に傾かせないようにして信じさせなければならない。≫ところで 13° 章の La. 357-Br. 185 で，パスカルは次のように叙している——≪すべてのことを円滑に処理なさる神の導きは，宗教を，精神のなかへは理性によって，心情のなかには恩恵によってお入れになる。ところが，それを精神と心情とのなかへ，力とおどかしとによって入れようとするのは，そこへ宗教を入れるのではなく，恐怖を入れるものである。では，≪力とおどかしとに≫よるのでなく，つまり≪無理強いなしに≫ (La. 7)，宗教を理性と心情との中へ入れる手段は，何んであろうか。これこそは，まさに——パスカルによれば——前出の≪習慣≫l'habitude 以外ではない。かくして La. 357 (13°) と La. 7 とは，内容上密接な関連を有しているのである。ところで La. 375, La. 396, La. 7 の三者は，意志・理性・習慣が信仰形成にあづかって不可分の重要なる役割を果すものであることを，示している。換言すれば，これら三断章は相互に関連しあっている。而して，La. 7 は 13° 中の La. 357 と連関しておるから，La. 375 および La. 396 は，La. 7 を介して La. 357 すなわち 13° 章と連関して来る。すなわち，La. 375

は La. 7, La. 357, La. 396 とともに, 13° に所属するものと, 言える（なお 7 参照)。

(189)——La. 376-Br. 279 について。この fr. の重要部分は, 次のところに存する——≪信仰は神よりの賜物である。われわれがそれを推理の賜物であると言っているなどと思わないでほしい。……推理は信仰へ導いてくれないのである。≫ この文章は, 信仰が理性の働きとしての ≪推理≫ を超越していること, この意味で信仰は≪神秘的, 超自然的≫mystérieux et surnaturel なるものに係わるものであることを, 示している。そうしてこの点で, 13° 中の La. 358-Br. 273 にまさしく照応している——≪もしすべてを理性に従わせるならば, われわれの宗教には神秘的, 超自然的なものが何もなくなるだろう。≫ それゆえ La. 376 は, 13° 章にぞくする。

(190)——La. 377-Br. 345 について。この fr. は以下のごとくである——≪理性は主人よりもずっと高圧的にわれわれに命令する。なぜなら, 後者に服従しなければ不幸であるが, 前者に服従しなければ, ばかであるから。≫この文の要旨は, 人は≪理性≫を尊重しこれに≪服従≫obéir すべきであるというにある。パスカルのキリスト教的信仰の立場からする理性尊重ないし理性肯定の叙述は, 13° 中の次の諸断章に見られる——≪理性の服従と行使, そこに真のキリスト教がある。≫ (La. 352-Br. 269)（強調点は論者, 以下同様), ≪……もし理性の原理に反するならば, われわれの宗教は不条理で, 笑うべきものとなろう。≫(La. 358-Br. 273), ≪二つの行き過ぎ。／理性を排除すること, 理性しか認めないこと。≫(La. 368-Br. 272) したがって当該の断章 (La. 377) も, ——パスカルの構想にあっては——これら 13° 中の諸断章と内面的に不離の関係にあるものと, 察せられる。それゆえ La. 377 は, 13° 章中に組み込まれるべきである。

(191)——La. 378-Br. 561 について。この fr. の最初の部分は, 次のごとくである——≪われわれの宗教の真理を納得させる方法が二つある。一は理性の力によるもの, 他は, 語る人の権威によるものである。……≫ この叙述には≪理性の力≫la force de la raison を無視せず, これを利用すべきであるという思想が見られるとともに, 他方≪理性の力≫のみでは不十分であり, ≪語る

人の権威≫ l'autorité de celui qui parle にも依らなければならないという思想が見られる。この点，13° の La. 352-Br. 269, La. 368-Br. 272 の主旨と，合致しているので，La. 378 は 13° 章にぞくする。

(192)——La. 379-Br. 604 について。この断章は，次の如くである——≪常識と人間の本性とに反する唯一の知識こそ，人々のあいだに常に存続してきた唯一のものである。≫ この断章の要旨は，次の 18°≪宗教の基礎と反論への回答≫中の La. 437-Br. 430 bis の内容と一致している——≪すべて不可解なものは，それでも依然として存在する。≫ それゆえ，La. 379 は 18° 章に属すると，言いうる。

(193)——La. 394-Br. 431 について。この fr. の終りの部分には，次の文章が見られる——≪人間はいったいどうなるのだろう。等しいのは，神となのか獣となのか。なんという恐ろしい距離だろう。われわれはいったいどうなるのだろう。すべてこれらのことによって，人間が道に迷っていること，本来の場所から堕ちていること，不安にかられてそれをさがしていること，もはやそれを見いだしえないでいることを悟らない者があろうか。そして，いったいだれが彼をそこへ向かわせてくれるのだろうか。最も偉い人たちにも，それができなかった。≫ パスカルは，この fr. 中で人間存在の根本的二重性，すなわちその偉大さと低劣さとを対比した後で，引用文中に見られるごとく，≪そしていったいだれが彼〔人間〕をそこへ向かわせてくれるのだろうか。≫ Et qui l'y adressera donc? と述べて，神こそが人間を本来の場所へ導く者であることを，暗示している。われわれはここに，人間にかんする知から神への移行を企図するパスカルの筆勢を読み取るのである。それゆえ，La. 394 は 15°≪人間を知ることから神への移行≫の章に入るべき断章と，推定しえよう。

(194)——La. 395-Br. 660 について。この fr. は，次のごとく叙しておる——≪……そこで，われわれのうちには，一つは良く一つは悪い二つの天性がある。神はどこにおられるか。君たちのいないところに。しかも神の国は君たちのうちにある。ラビたち。≫ この引用文の前半は，直前の La. 394-Br. 431 の内容と部分的に一致している。而して≪神はどこにおられるか。云々≫Où est Dieu?……と述べて，善悪相反する二本性を有する人間のさまざまな矛盾とこ

れより生ずる苦悩を救済する者が，≪神≫であることを暗示する点でも，前掲の La. 394 と一致ないし必然的連関を示している。最後に，パスカルは神のありかを，≪君たちのいないところに。しかも神の国は君たちのうちにある。≫ où vous n'êtes pas, et le royaume de Dieu est dans vous. と述べて，普通の読者にとっては，直ぐには理会しがたい神の在り方を，提示している。かくしてパスカルは，人間本性の知から神秘なる神のあり方へと，彼の筆を進めることによって，読者の宗教的関心を高めようとする意図が，覗えるのである。

以上の諸理由により，われわれは La. 395 が La. 394 と内面的連関を有すること，そうして両者がともに≪人間を知ることから神への移行≫をテーマとするかぎりにおいて，La. 395 が La. 394 の所属する 15° 章中に同じく所属することは，もはや自然の理である。

(195)——La. 396-Br. 245 について。この fr. は，13° 章にぞくする（7参照)。

(196)——La. 415-Br. 628 について。La. 415 の主旨は，ユダヤ民族の歴史の確かさ（信用度の高さ）とその古さとを示すことであり，これは 21° の La. 552-Br. 620 中の≪律法≫ la loi の永続性の主張のための伏線と，見られる。なぜなら La. 552 は，ユダヤ民族が≪今日まで絶えず存続してきた≫こと，またその律法が≪幾世紀にもわたり絶えず保持されて来たということ≫を，強調しているからである。したがって La. 415 は La. 552（21° 章）と内容的に連関しており，前者は後者と同一の章——21°≪永続性≫Perpétuité に属することになる。

(197)——La. 416-Br. 594 について。この fr. は，中国およびメキシコの歴史と称されるものが，信頼に価しないことを述べているが，これは La. 415 の内容と連関していることは明らかであり，そして La. 415 は 21° 章に所属するものであるから，La°416 も同章にぞくする。

(198)——La. 417-Br. 479 について。この fr. 中には，≪一人の神があるとしたら，彼のみを愛すべきであり，……≫および≪……われわれをそそのかして，一人の神以外のものに執着させるすべてのものとを，憎まなければならない。≫という叙述があるが，これは Non classé の La. 422-Br. 487 の思想と一

致している——≪その信仰において，一人の神をあらゆる事物の本源として崇めない宗教，その道徳において，唯一の神をあらゆる事物の目的として愛さない宗教は，すべて虚偽である。≫（強調点は論者） ところでこの引用文の末尾は，明らかにこの fr. (La. 422) が 16° 章——≪他宗教の虚偽≫ Fausseté des autres religons に属するものであることを，示している。それゆえ， La. 422 と内容上思想的に一致する La. 417 も，16° 章に所属するものと言わねばならない。

(199)——La. 418-Br. 492 について。この fr. 中には，次の叙述が見出される——≪自分のうちにある自愛心を憎まず，また自分をおだてて神にしようとする本能を憎まない人は， 全く盲目である。≫， ≪……他のどんな宗教も自愛心が罪であること，われわれが生まれながらそのなかにあること，それに抵抗しなければならないことを示さず，その救済法を授けることを考えなかった。≫ これらの引用文ならびに La. 418 全体は， La. 402-Br. 435 の部分を詳述したものと見られ， La. 402 中の次の叙述に照応している——≪これらの神聖な知識がなかったならば，人々は，過去の偉大のなごりである内にある感情によって自分を高める……≫，≪もし，彼ら〔人々〕が人間の優秀さを知ったとしても，その腐敗を知らない。その結果，怠惰はうまく避けても，尊大のなかに身を滅ぼしてしまうのである。≫，≪このように，ただひとり誤りと悪徳とからまぬかれているので，人々を教え，正しうるのは，キリスト教だけであることを明らかに示しているのである。≫詳言すれば，La. 418 中の≪自愛心≫，≪自分をおだてて神にしようとする≫こと，≪他のどんな宗教も……救済法を授けることを考えなかった≫ということは，La. 402 中の≪尊大≫，≪自分を高める≫こと及び≪人間の優秀さ≫，≪人々を教え，正しうるのは，キリスト教だけであること≫に，それぞれその本旨において，対応一致している。そうして La. 402 は，16° 章に所属する断章であるから，これに関連する La. La. 418 も同章に属するものと，言いうる。

(200)——La. 419-Br. 589 について。この fr. は，≪キリスト教が唯一の宗教ではないということについて。≫ Sur ce que la religion chrétienne n'est pas unique. という見出しを持つものであり， その内容は， キリスト教が唯

一の宗教ではないという事実こそが，真の宗教たる所以であることを説くものであるが，その理由は18° 章中の La. 449-Br. 585 に見出される。したがって La. 419 と La. 449 とは，密接な関係にあり，前者は後者と同じ章 (18°) 中にぞくすると，判定しうる。

(201)——La. 420-Br. 259 について。この fr. は，≪偽りの宗教≫les fausses religions と ≪真の宗教≫ la vrai [religion] について述べているから，16°≪他宗教の虚偽≫の章にぞくする。

(202)——La. 421-Br. 593 について。この fr. は，≪中国史≫ Histoire de la Chine なる語句が見出されるので，La. 421 は 16° 章中に属するものと，見られる。

(203)——La. 422-Br. 487 について。この fr. は， 16° 章にぞくする (198 参照)。

(204)——La. 425-Br. 590 について。この fr. は，次の如くである——≪諸宗教に対しては真剣でなければならない。真の異教徒，真のユダヤ人，真のキリスト者。≫ この断章の暗示するところは，≪諸宗教≫ すなわち ≪真の異教徒≫，≪真のユダヤ人≫，≪真のキリスト者≫の各々が，信ずる各宗教なるものを，≪真剣≫に比較検討すべきであるというに存するとおもわれる。したがってこの fr. は，≪キリスト教が唯一の宗教ではないということについて。≫なるタイトルを有する La. 419-Br. 589 と，内容上必然的に連関する。ところでLa. 419 は 18° 章にぞくするので (200 参照)，La. 425 も同章に属することになる。

(205)——La. 426-Br. 780 について。この fr. の前半は，≪イエス・キリストは，聞かずに罪を定めたことはなかった。≫となっている。これは，律法の形式主義的尊重の立場に対するイエスの愛の立場を表明したものと，考えられる。したがってこの断章は，17° ≪愛すべき宗教≫ Religion aimable の章に所属すべきものである。

(206)——La. 427-Br. 450 について。この fr. は，17° 章にぞくする。なぜなら，この断章内容の後半の部分の叙述は，17° の章名なる≪愛すべき宗教≫の内容に相応しいものであるから——≪……人は人間の欠点をかくもよく知っ

ている宗教を尊敬するほかに，またそれに対してかくも望ましい救治法を約束する宗教の真理を求めるほかに，何をなしえるであろうか。≫

(207)——La. 428-Br. 798 について。この fr. は，≪福音書の文体≫ならびに≪福音史家≫の叙述態度——≪筆の運び方がいかに冷静であったか≫を述べたものである。パスカルの意図は，福音書記者の叙述が，客観的なものであることを指摘することによって，叙述内容そのものの正確さを立証することに，あると見られる。ところで23°≪イエス・キリストの証拠≫Preuves de Jésus-Christ 中の La. 593-Br. 800 は，福音書記者の描くイエスの死の姿に触れ，これをもってイエス・キリストの証拠の一つとしている。こうしてわれわれは，La. 428 は La. 593 の結論を引き出すための不可欠の前提ないし根拠であることを，知るのである。したがって，La. 428 は La. 593 と必然的連関を持つものであり，それゆえ 23° 章に所属すべきものと，判定しうるのである。

(208)——La. 429-Br. 615 について。この fr. の内容自身，キリスト教擁護への批判に対する回答を構成しているので，18°≪宗教の基礎と反論への回答≫Fondements de la religion et répone aux objections の章にぞくする。

(209)——La. 452-Br. 565 について。この fr. は，次のごとくである——≪であるから，宗教の不分明そのもののうちに，それについてわれわれの持っている光の少ないことのうちに，それを知ることに対してわれわれが無関心であることのうちに，宗教の真理を認めるがよい。≫ ところで，この断章内容とその主旨を等しくするものに，18° 中の La. 439-Br. 566 がある——≪神が，ある人々を盲目にし，他の人々を啓蒙しようとされたということを，原則として認めないかぎり，人は神の御業を何事も理解しない。≫ それゆえ La. 452 は，18° 章に属するものと，言える。

(210)——La. 453-Br. 559 bis について。この fr. は，≪永遠の存在者は，一度存在すれば，常に存在する。≫というものであるが，La. 319-Br. 559 中には，次の叙述が存する——≪……だが，神が常にではないにしても，時おり現われたということは，両義性を取り去ってしまう。もし神が一度でも現われたとしたら，神は常に存在する。≫ ところで，この引用文中の後半は La. 453 と一致しており，前半は隠れた神にかんするものである。而して隠れた神にかん

する諸断章は，27°≪結論≫にぞくすべきものであるから（162 参照），La. 453 も 27° 章に所属すると，判定しうる。

(211)——La. 454-Br. 201 について。≪一方の人たちの反論も，他方の人たちのそれも，彼ら自身に対してだけ有効で，宗教に対しては有効でない。すべて不信者の言うことは……≫というのが，この断章の全内容である。この内容に徴して，この fr. が 18° ≪宗教の基礎と反論への回答≫の章に属することは，明らかである。

(212)——La. 455-Br. 455-Br. 863 について。この fr. は，次のごとくである——≪すべての人はそれぞれ一つの真理を追求すればするほど，いっそう危い誤りにおちいる。彼らのあやまちは一つの偽りを追求することにあるのではなく，むしろもう一つの真理を追求しないことにある。≫ この叙述内容は，人は一般に，部分真理をのみ追求しているところに，欠陥があると説くものであり，したがって全体的真理をこそ追求すべきであるという主張と結びつくことになる。而してかような主張を，われわれは，La. 462-Br. 862 (Non classé) のうちに見出すことができる——≪……そういうわけで，異端を防止する最も手近い方法は，真理の全部を教えることである。また彼らを反駁する最も確かな方法は，その全部を宣べることである。≫（強調点は論者） ところでこの断章（La. 462）の初めの部分は，次のようである——≪教会は，相反する誤りによっていつも攻撃されてきた。しかし，現今のように，同時にされたことはおそらくあるまい。……≫ この書き出しは，明らかにキリスト教に対する≪反論≫にかんするものであり，最初の引用文は，反論への≪回答≫の仕方にかんするものである。それゆえ，この La. 462 は，18° ≪宗教の基礎と反論への回答≫の章にぞくするものと，言える。したがって，内容上 La. 462 と連関する La. 455 も，18° 章に所属すると，判定しうる。

(213)——La. 456-Br. 428 について。この fr. は，≪自然によって神を証明すること≫ prouver Dieu par la nature について述べているが，14° ≪この神の証明方法の卓越性≫中の La. 381-Br. 543 では，≪神の形而上学的証拠≫ les preuves de Dieu métaphysiques と形而上学の≪証明≫ cette démonstration のことが，触れられている。ところで自然による神の証明なるもの

は，形而上学的証明の一種であるから，La. 456 は，La. 381 の所属する 14° 章にぞくすることになる。

(214)——La. 457-Br. 577 について。この fr. は，次の如くである——≪神はこの民族の盲目を，選ばれたものの幸福のために利用された。≫ この引用文中の≪この民族≫ ce peuple とは，ユダヤ民族のことであり，したがってこの断章は，ユダヤ民族の≪盲目≫ l'aveuglement について述べていることになる。ところで 19°≪表徴としての律法≫中の La. 490-Br. 662, La. 504-Br. 670 は，それぞれユダヤ民族の盲目について，次のごとく叙している——≪肉的なユダヤ人は，彼らの預言のなかに告げられたメシアの偉大さをも卑賤をも理解しなかった。≫ (La. 490)，≪世界がこのような肉的な迷妄のなかで年を重ねていたとき，イエス・キリストは預言された時期に幸福されたが，人が予期したような光輝をもってでなかった。そのため彼ら〔ユダヤ人〕はそれがメシアであるとは思わなかった。≫ (La. 504) したがって La. 457 は，La. 504, La. 490 と連関していることが分る。それゆえ La. 457 は，19° 章に属することになる。

(215)——La. 458-Br. 622 について。この fr. の主旨は，ユダヤ民族の史的意義を示さんとすることにあり，かつ La. 415, La. 416 と連関しているが，後二者はともに，21° ≪永続性≫の章にぞくするものであるから (196, 197 参照)，La. 458 も 21° 章に属する。

(216)——La. 459-Br. 289 について。この fr. は，≪証拠≫なる小見出しを持つものであり，これは内容上宗教の証拠を意味している，而して≪宗教の基礎≫をなすものであり，かつ≪反論の回答≫をも構成しているので，18° に所属する。

(217)——La. 460-Br. 567 について。この断章は，次の如くである——≪二つの相反する理由。そこから始めなければならない。そうでなければ，われわれは何事も理解せず，すべてが異端的である。そして，おのおのの真理の終わりに，反対の真理が想起されることをも付け加えなければならない。≫ この叙述内容の主旨は，明らかに La. 462-Br. 862 中の次の部分の言わんとするところと一致しておる——≪教会は相反する誤りによっていつも攻撃されてきた。

……／信仰は互いに矛盾しているように見える多くの真理を含んでいる。…そして，普通ありがちなことは，対立する二つの真理の関連を理解しえないで，一方を容認することは他方を除外することであると信じ，一方に固執して他方を排斥し，われわれを彼らに反するものであると考えることである。ところで，排他こそ，彼らの異端の原因であり，……≫。

ところで La. 462 と 18° 中の La. 448-Br. 765 とは，内容的に連関している——≪これらの矛盾のみなもとは，イエス・キリストにおける神人両性の結合である。≫ (La. 462)，≪相反のみをもと。十字架で死ぬまでへりくだった神。……イエス・キリストにおける二つの本性，……≫ (La. 448) それゆえ，La. 462 は 18° 章に所属するものであるが，La. 460 は前出のごとく，La. 462 と一致関連しているから，この断章 (La. 460) も 18° にぞくすると，言える。

(218)——La. 461-Br. 576 について。この fr. 中には，次の叙述が存する——≪これらの預言が神から出たことは，出来事が証明した……≫。24°≪預言≫ Prophéties 中の La. 620-Br. 734 にも，同主旨の叙述が見出される——≪……世界の行程についてかくも驚くべき預言があり，しかもそれが成就したのを見ては，それを神のわざであると思うであろう。≫ かくて La. 461 は，La. 620 と関連することによって，24° 章に所属することが分る。

(219)——La. 462-Br. 862 について。この fr. は，18° 章にぞくする (127 参照)。

(220)——La. 463-Br. 583 について。この fr. は，次のごとくである——≪弱者とは，真理を認めはするが，自分の利害がそれに合致するかぎりにおいてのみ，それを支持する人々のことである。その他のときには彼らは真理を放棄する。≫ この断章の冒頭の語たる≪弱者≫ malingres は，≪悪らつな者≫ malins と読むべきだとする説 (Tourneur, Lafuma の説) があるが，いずれにせよ，この断章の主旨が次の断章と内容上密に連関していることは，否定しえない——≪腐敗した本性。／人間は，彼の存在を形づくっている理性によって行動しない。≫ (La. 132-Br. 439) なぜなら，パスカルはその論述『幾何学的精神について』De l'esprit géométrique において，≪理知と心情とは，真理が魂に入る門のごときものである。≫ (Brunschvicg, Pascal, Pensées et opus-

cules, p. 186. 強調点は論者）と，述べているからである。言い換えれば，La. 463 中の≪弱者≫ないし≪悪らつな者≫と呼ばれている者は，パスカルの立場からすれば，≪真理を放棄する≫かぎり，即ち≪理性によって行動しない≫かぎり，≪腐敗した本性≫ nature corrompue の持ち主と言いうるのである。而して La. 132 は，15° bis ≪堕落した本性≫の章に属すべきものであるから（XIV 回，56 参照），La. 463 も同章に入る。

(221)——La. 464-Br. 568 について。この fr. は，キリスト教への≪反論≫ Objection と≪答え≫ Réponse という形式で構成されているので，18° 章の≪宗教の基礎と反論への回答 réponse aux objections≫にぞくする。

(222)——La. 465-Br. 899 について。この fr. の冒頭の文章——≪聖書の章句を濫用し，自分の誤りを支えてくれそうに見えるあの章句を見いだして得意になる人々に対して。≫に徴して，18° 章に属するものと，判定しうる。

(223)——La. 466-Br. 737 について。この fr. の初めの方に，≪ここにあらゆる抗議 objections への回答 réponse がある。≫という叙述があるので，La. 464 と同様，18° 章にぞくする。

(224)——La. 467-Br. 741 について。この fr. は，24° ≪預言≫の章にぞくする。その理由は，次のごとくである。この fr. の主旨は，互いに異る二者（モーセとヨブ）が，共通の目標として，イエス・キリストを目指しているという点に存する。ところで，これは 24° 中の La. 623-Br. 710, La. 27-Br. 709 の要旨と一致している——≪……ここにそれ以上のことがある。それは歴代の人々が四千年にわたって，たえず変わらずつぎつぎに現われ，この出来事〔イエス・キリストの来臨〕を預言するのである。≫（La. 623），≪同一のことを多くの仕方で預言するには，大胆でなければならない。≫（La. 627） それゆえ，La. 467 は 24° 章に入る。

(225)——La. 468-Br. 217 について。この fr. は，18° 章にぞくする。なぜなら，この断章中の≪自己の家≫とは，キリスト教会を，≪権利証書≫は新約および旧約を，≪相続人≫とは当代のキリスト教徒を，それぞれ暗に意味していると，見られるからである。また，≪それを調べないで云々≫は，キリスト教の証拠としての聖書の内容（倫理，預言，奇蹟，象徴的意味，等）の吟味を

意味するものと，考えられるので，この fr. は，パスカルの予定していた≪宗教の証拠≫の前，すなわち 18°≪宗教の基礎と反論への回答≫中に置かれるはずであったと，判定しうる。

(226)——La. 469-Br. 588 について。この断章は，18° に属する。次の叙述が存するからである——≪われわれの宗教は賢くもあり愚かでもある。賢いというのは，それが最も知恵に富み，奇跡，預言などの上に最もかたく立てられているからである。≫ そうして，この文中の末尾における≪……の上に最もかたく立てられている≫la plus fondée en…とは，まさに≪宗教の基礎≫ Fondements de la religion の≪上に最もかたく立てられている≫ことを，意味するものにほかならないから， La. 469 は当然≪宗教の基礎≫の章（18°）中のものと，言わねばならない。

(227)——La. 470-Br. 805 について。この fr. の最初に出てくる≪二つの基礎≫ les deux fondements とは， 言うまでもなく≪宗教の基礎≫を指しているから，この断章（La. 470）は 18° にぞくする。また，この断章中に見出される≪奇跡≫なる語は，文意の上で La. 469 中の≪奇跡≫と関連しており，かつ La. 469 は 18° 章にぞくするものであるから（226 参照），この点から見ても，La. 470 は 18° に属することが，分る。

(228)——La. 471-Br. 222 について。この fr. は，≪無神論者≫Athée なるタイトルを有し，内容も復活，処女懐胎の奇蹟への批判に対する回答を構成しているので，18°≪宗教の基礎と反論への回答≫の章にぞくする。

(229)——La. 472-Br. 285 について。この fr. の最初の部分は，次の通りである——≪この宗教は，あらゆる種類の精神の人に釣り合っている。≫ ところで要旨において，これと一致する叙述が，16° 中の La. 413-Br. 251 に見出される——≪ひとりキリスト教だけは，外的なものと内的なものとが混ぜ合わされているので，すべての人に釣り合っている。≫ したがって La. 472 は，16° 章中にぞくする。

(230)——La. 473-Br. 815 について。この fr. および La. 474-Br. 263, La. 475-Br. 833, La. 477-Br. 817, La. 478-Br. 818 の 5 個の断章は，すべて 18° に属する。なぜなら，これらの断章は，≪奇跡≫に対し否定的ないし懐疑的態度

を採る論者への反論と，見られるから。

(231)——La. 474-Br. 263 について。直前参照。

(232)——La. 475-Br. 833 について。(230) 参照。

(233)——La. 476-Br. 830 について。この fr. は，≪預言は漠然としていたが，もはやそうではない。≫というものであるが，この内容は La. 461-Br. 576 中の次の叙述と，一致している——≪これらの預言が神から出たことは，出来事が証明したので，その他の預言も信じられるはずである。≫ ところで La. 461 は 24°≪預言≫の章に属するものであるから (218 参照)，La. 476 も同章にぞくする。

(234)——La. 477-Br. 817 について。(230) を参照のこと。

(235)——La. 478-Br. 818 について。(230) を参照。

(236)——La. 511-Br. 794 について。この fr. は末尾は，≪なぜ彼〔イエスキリスト〕は表徴〔象徴〕によって預言されたのか。≫ となっているが，これは 19°≪象徴的律法≫中の La. 489-Br. 758 の≪もしその〔メシアの〕来臨の時期が漠然と預言されていたら，善人にとっても漠然としたものであったであろう。……そこで，時期は明らかに預言され，仕方は表徴によって預言されたのである。≫ と，密接な連関を有している。即ち La. 489 は，La. 511 の理由に関するものである。したがって，後者は前者と同じ章 (19°) 中にぞくする。

(237)——La. 512-Br. 644 について。この fr. は，≪表徴≫ Figures なる小見出しを持っているので，19°≪象徴的律法≫ Loi figurative の章にぞくする。

(238)——La. 513-Br. 572 について。この fr. は，次のごとくである——≪使徒詐欺師説。——時期は明らかに，仕方は曖昧に。——表徴の五つの証拠。2000〔1600 預言者たち。／400 散らされた人たち。≫ この引用文の中，≪時期は明らかに，云々≫ は 19° 章の La. 489-Br. 758≪……の時期は明らかに預言され，仕方は表徴によって預言されたのである。≫ に，そうして≪表徴の五つの証拠 preuves≫は同じく 19° 中の La. 508-Br. 642 の 5 個の≪証明≫ preuves に，それぞれ照応一致を示している。すなわち，この fr. (La. 513) 中のこれらの叙述は，19° 章≪象徴的律法≫を指向している。さらに 1600 云

々は，未分類断章の La. 556-Br. 618 中の次の叙述に明白に一致対応している——≪……神は自分ら〔ユダヤ人たち〕に真理を啓示された，この真理はいつまでも地上に存存するであろうと，宣言するのである。事実，他の宗派は断絶したが，この真理は絶えず存続して，それから四千年になるのである。……千六百年のあいだ，彼らが預言者と信じた人々がいて，時期と仕方を預言した。／四百年後に，彼らは方々に散らばった。それはイエス・キリストがいたるところに宣べ伝えられるためであった。……それ以来，ユダヤ人は方々に散らばり，呪われながらも，なお存続している。≫ この叙述内容に徴するとき，この fr. La. 556 が 21° ≪永続性≫ Perpétuité の章にぞくすることは，明らかである。最後に，La. 513 の冒頭に出てくる ≪使徒詐欺師説≫ Hypothèse des apôtres fourbes は，23°≪イエス・キリストの証拠≫Preuves de Jésus-Christ 中の La. 587-Br. 801 に，同様の主旨が見出される——≪イエス・キリストの証拠。／使徒詐欺師説は全くばかげたものである。この説をもっと突きつめてみたまえ。……≫これによって，La. 513 は 23° 章に関連していることが，分る。

以上により，La. 513 は 23°, 19°, 21° の各章に連関していることが明らかになったが，La. 513 そのものを考察するとき，19°, 21° に関係する各叙述——象徴にかんするものと永続性にかんするもの——は，23° の使徒詐欺師説を否定すべき論拠を示すものであることが，分る。なぜなら，形式上≪使徒詐欺師説≫なる語は，この fr. の小見出しと判定しうるからである。また内容上から言っても，イエス・キリストの証拠としてユダヤ人の永続性が挙示されていることは，23° 中の La. 588-Br. 640 によって，裏書きされるところである。換言すれば，La. 513 中の≪2000 云々≫は，ユダヤ人の永続性と関連するものであり（前出の La. 556 との一致，参照），この永続性によってイエスのキリストたることが証明されるならば，使徒たちの証言が正しいこと，すなわち使徒たちが詐欺師ではないことが，証明されるのである。

以上形式的にも内容的にも，19°, 21° に関係する La. 513 中の各叙述は，23° と密に連関する≪使徒詐欺師説≫に対する反駁の論拠を，簡略に述べたものであることが，了解されるのである。それゆえ La. 513 のテーマは，使徒詐

欺師説そのものへの反論ということにあり，したがって La. 513 は，このテーマの本来意図する≪イエス・キリストの証拠≫の章 (23°) に属すべきものである。

扨て La. 513 が 23°, 19°, 21° の各章と関係を持つことは，19° ≪象徴的律法≫，21°≪永続性≫ の両章が 23°≪イエス・キリストの証拠≫ の章への伏線として置かれたものであることを，示ている。そうしてこの事実こそは，われわれが既に指摘したパスカルの方法——《gradation》を，われわれに想起せしめるに十分である（Ⅶ，Ⅷ回参照)。

(239)——La. 514-Br. 676 について。この fr. 中の≪これらの書≫ces livres とは，文意の上から言って，≪イエス・キリストを知る≫ connaître Jésus-Christ のに必要な書物——新旧の聖約の書を意味するのでなければならない。ところで 19°≪象徴的律法≫の章は，章中の多くの個処で，聖書の象徴的性格について語っている。そうして La. 514 も，聖書の象徴的性格について述べている，すなわち≪ユダヤ人のためにこれらの書の上におかれたヴェール≫ Le voile qui est sur ces livres pour les Juifs が，それである。したがって，La. 514 は 19° に属するものと，言いうる。

(240)——La. 515-Br. 688 について。この fr. は，≪「メム」は秘義的ななどと，私は言わない。≫という短断章である。パスカルは，18°≪宗教の基礎と反論への回答≫中の La. 465-Br. 899 において，≪聖書の章句を濫用し，自分の誤りを与えてくれそうに見える章句を見いだして得意になる人に対して≫なる句を，冒頭に掲げている。ところで，La. 515 中に述べられている「メム」の秘義的解釈も，パスカルからすれば，≪聖書の章句を濫用≫する立場に相当するから，La. 515 も La. 465 と同じ章 (18°) 中に属する。

(241)——La. 516-Br. 68 について。この fr. は，『イザヤ書』と『エレミヤ書』における，神の象徴的言葉として表現せられている命令および律法にかんするものであるから，19° 章に所属すべきものである。

(242)——La. 517-Br. 659 について。La. 517，La. 518 は，ともに 19° 章にぞくする。その理由は，次のごとくである。（イ）≪象徴≫なる語を小見出しとして，ないし小見出し中に持っていること。（ロ）両断章は，聖書が象徴的

なるものであるということを，その主旨とするものであるが，同様の主旨のものは，19° 中の La. 491-Br. 684, La. 493-Br. 685, La. 501-Br. 680. La. 506-Br. 687, La. 510-Br. 691 にも，これを見出しうること。

(243)——La. 518-Br. 571 について。(242) を参照のこと。

(244)——La. 519-Br. 675 について。 La. 519 は 19° 章にぞくする。なぜなら，この fr. は聖書（旧約）解釈にかんするユダヤ人の誤解をテーマとするものであり，19° の La. 490-Br. 662, La. 491-Br. 684, La. 504-Br. 670 と，同主旨のものであるから。

(245)——La. 520-Br. 646 について。 この fr. は，キリスト教の ≪教会≫ l'Eglise と対立する ≪ユダヤ人の会堂≫ la synagogue もまた，≪真理≫ la vérité のための一種の≪象徴≫であることを，述べている。

扨て La. 519-Br. 675 中にも，同様の思考が見られる——≪だから，神は，エジプトや紅海からの脱出，……などを示されたのである。そういうわけで，敵国民とは，彼らの知らないメシアその人の表〔象〕徴であり，形象である。≫ この叙述においては，ユダヤ人に対立する≪敵国民≫ ce peule ennemi（エジプト人）が，メシアの象徴として説かれている。両断章にあっては，謂わばプラスの象徴（教会，モーセに率られたユダヤ人）に否定的に対立するもの（会堂，エジプト）も，一種の象徴——いわば，マイナスの象徴であるとする思想が，見られる。かかる思想の根本は，同じ 519 中の初めの部分に見出される——≪……つまずくであろう。とはいえ，ある人々を盲目にし，他の人々を開眼するためにつくられたこの聖書は，それによって盲目にした人々のうちにすら他の人々の知るべき真理をおいていた。≫

以上によって，La. 520 は La. 519 と内容上，本質的連関を有していることが，分る。ところで，La. 519 は，19° 章にぞくするものであるから（236 参照），La. 520 も当然同章に属することになる。

(246)——La. 521-Br. 651 について。この fr. も，19° 章にぞくする。なぜなら，19° の La. 488-Br. 649 は≪あまりに行きすぎた表〔象〕徴に反対して述べること。≫ を説いており，La. 521 はこうした象徴論にぞくするもの——≪黙示論者，アダム以前人類存在論者，千年至福論者など≫の諸説について，

論じておるからである。ところで，例えば黙示論者の所説が≪こじつけと思われる≫ものと同類であることは，La. 411-Br. 650 の最初の部分に徴して明らかである——≪表徴のなかには明白な論証的なものもあるが，多少こじつけと思われるものもないではない。後者は他の方法で説得されている人々に，証拠を与えるだけである。それらは黙示主義者のそれに似ている。≫

(247)——La. 522-Br. 669 について。この fr. は，≪表徴〔象徴〕が変わるのは，われわれの弱さのゆえである。≫という短いものであるが，この主旨は，19° 中の La. 504-Br. 670 の≪すべて愛にまでいたらぬものは表徴である。……／このようにして，神はこの愛の唯一の戒めに多様性を与え，われわれを唯一の必要なものに常に導くこの多様性によって，多様性を求めるわれわれの好奇心を満足させてくださるのである。なぜなら，必要なるものはただ一つであるが，われわれは多様性を好むからである。≫ の主旨と関係している。即ち，La. 522 の≪われわれの弱さ≫ notre faiblesse と，La. 504 の≪われわれが多様性を好む≫ nous aimons la diversité こととは，内面的連関を有しておるのである。このことは，La. 269-Br. 139 中において，われわれの見出しうるところである——≪……私は，まさに有効な理由が一つあることを発見した。それは，弱く，死すべく，そして，われわれがもっと突っこんで考えるときには，われわれを慰めてくれるものは，何もないほどに惨めな，われわれの状態の，本来の不幸のうちに存するものである。……／ここから，賭事，女性たちとの話，戦争，栄職などがあんなに求められることになるのである。≫（強調点は論者） 以上のようにして，La. 522 と La. 504(19°) とは，本質的に関連しており，したがって前者は後者と同じ章 (19°) 中に属することになる。

(248)——La. 523-Br. 656 について。この fr. 中には，≪アダムが形づくられるためにモーセがしるした六日は，イエス・キリストと教会とを形づくるための六つの時代の形象にすぎない。≫ という叙述があるが，この文中の，≪形象≫ peinture なるものは，文意全体から推して，≪象徴≫ signe と同義語と考えうるから，≪象〔表〕徴≫を説く 19° 章中にぞくする。

(249)——La. 524-Br. 766 について。この fr. は，≪象徴≫Figures なる小見出しを有するから，19° に属する。

(250)——La. 525-Br. 664 について。この fr. も，≪象徴的なるもの≫ Figuratif という小見出しを持つので，19° 章に所属する。

(251)——La. 526-Br. 663 について。この fr. は，19°にぞくする——(250) と同じ理由による。

(252)——La. 527-Br. 666 について。この fr. は，新旧聖約の書の内容を，≪象徴≫として解するものであるから，19° 章にぞくする。

(253)——La. 528-Br. 519 について。この fr. は，象徴的に語るイエスの言葉が，弟子たちのつまづきの石となりうることを主旨とするものであるが，同様の主旨が La. 518-Br. 571 の最後の部分に出ている。ところで La. 518 は 19° に所属するから (242 参照)，La. 528 も同章に属することになる。

(254)——La. 529-Br. 782 について。この fr. 中には，『マタイ福音書』5・17 が引用されている——≪「私が来たのは律法を廃するためではない，かえって成就するためである」≫。(強調点は論者) この引用文は，23° 中の La. 589-Br. 697 の次の叙述（パスカルによるラテン語）と，密接な連関を有している——≪成し遂げられたことを見よ≫，≪成し遂げられるべきことを思え≫。したがって La. 529 は，23°≪イエス・キリストの証拠≫の章にぞくする。

(255)——La. 530-Br. 673 について。この fr. の冒頭の引用文（『出エジプト記』25・40)——≪「あなたは，山で示された型に従って造らなければならない」≫は，19° 中の La. 481-Br. 674 の最初の引用文と同一である。次に，ユダヤ人の宗教がメシアの真理の ≪象徴≫ であるという主旨を説く点において，La. 530 と La. 520-Br. 646 とは，一致している。ところで La. 520 は 19° 章にぞくするものであるから (245 参照)，La. 530 は 19° にぞくする。

(256)——La. 531-Br. 671 について。(イ)——この fr. は，次のごとくである——≪国々と王たちとを制御すべく召されたユダヤ人は，罪の奴隷であった。そして奉仕と服従とを使命としたキリスト者は，自由の子である。≫ この叙述の前半は，La. 518-Br. 571 中の ≪……この民族〔ユダヤ人〕はメシアの卑賤な貧しい来臨によって裏切られ，彼の最も残忍な敵になった。≫と，内容上一致しているが，La. 518 は 19° にぞくするので (242，243 参照)，La. 531 も同じ章中のものと，言いうる。

(ロ)——La. 531 の後半は，19° 中の La. 502-Br. 683 における引用文——≪「あなたがたは真に自由なるものとなるであろう。」≫ の意味するもの（パスカルにとって）と，一致を示している。それゆえこの点にあっても，La. 531 は 19° に属する。

(257)——La. 532-Br. 665 について。この断章は，次のごとく始まる——≪愛は表徴的な戒めではない。イエス・キリストは表徴を取り去り，真理を立てるために来られた……≫（強調点は論者）。これは，19° 中の La. 503-Br. 692 の末尾と，要旨において照応一致している。——≪……至聖者である救い主は「永遠の」正義を，すなわち，律法的な正義でない永遠のそれをもたらすであろう，……≫（強調点は論者）。それゆえ La. 532 は，19° 中のものである。

(258)——La. 533-Br. 661 について。この fr. の主旨は，≪秘跡≫ mystère としての≪悔俊≫ pénitence にかかわるものであるが，La. 527-Br. 666 中には，≪旧約聖書は来世の喜びの表徴を含んでいたが，新約はそれに到達する方法を含んでいる。／表徴は喜びであり，方法は悔俊であった。≫（強調点は論者）と述べられていて，La. 533 と内容的に密接に連関している。ところが，La. 527 は 19° 章にぞくするものであるから（252 参照），これに関する La. 533 は当然 19° に所属する。

(259)——La. 534-Br. 658 について。この fr. は，≪病めるからだ≫ corps malades が≪病める魂≫ l'âme malade の≪表徴≫ figures であることを，述べたものであるので，≪「表徴」の章≫ le chapitre des Figuratifs——パスカル自身による《Loi figurative》の略称（La. 430-Br. 570 に所載）を持つ章——すなわち，19° 章にぞくする。

(260)——La. 535-Br. 654 について。この fr. は 19° に属する。その理由は次のごとくである。(イ)この断章が，≪表徴≫について語っていること。——≪表徴のうちの真理≫，≪世界の滅亡の表徴≫，≪二人の子によって表徴されたユダヤ人と異邦人。≫(ロ)≪最後の晩餐ののちの聖餐≫と 19° の La. 504-Br. 670 の末尾——≪しかし，キリスト者は，聖餐をすら彼らの目ざしている栄光の表徴と解する。≫ との連関。(ハ)≪表徴ののちの真理≫と，La. 532-Br. 665

の≪イエス・キリストは表徴を取り去り，真理を立てるために来られた……≫との一致。ところで La. 532 は 19° 章にぞくするから（257 を参照），La. 535 も，同章にぞくする。

(261)——La. 549-Br. 630 について。La. 549 は La. 557-Br. 630 と，文章の点で一致を示している，即ち≪彼らにはもはや預言者があらわれなくなってからのマカベア家の人々。イエス・キリスト以後のマソラ。≫なる叙述を共有している。次に La. 557 は，ユダヤ民族の世界における例外的存在という特徴指摘を主旨としており，この点で La. 550-Br. 617，La. 553-Br. 631 と関連を有している。ところで La. 550 は≪永続性≫Perpétuité なるタイトルを有し，この fr. 自身およびこれと関連する諸断章が，21°≪永続性≫の章中に所属するものたることを，示している。即ち，La. 549，La. 550，La. 552，La. 553，La. 557 は，すべて 21° に属している。

(262)——La. 550-Br. 617 について。直前参照のこと。

(263)——La. 551-Br. 621 について。この fr. の主旨は，キリスト教徒の出現の日まで，神がユダヤ人の存続を図ったというにある——≪天地創造と大洪水とは過ぎ去って，神は……メシアがその霊をもって形づくられる一民族の興るときまで，彼ら〔ユダヤ人〕を存続 durer させようとさせた。≫（強調点は論者）したがってこの主旨から言って，この fr. は 21° ≪永続性≫の章に入る。

(264)——La. 552-Br. 620 について。(261) を参照。

(265)——La. 553-Br. 631 について。(261) を参照。

(266)——La. 554-Br. 610 について。(イ)この fr. は，次のごとき要旨のダイジェストが，冒頭に附されている——≪真のユダヤ人と真のキリスト者とは同一の宗教を持っていることを示すために。≫ Pour montrer que les vrais Juifs et les vrais Chrétiens n'ont qu'une même religion. そうして同主旨のものが，21° の La. 545-Br. 609 の末尾に見られる——≪真のユダヤ人と真のキリスト者とは，彼らをして神を愛せしめるメシアをあがめる。≫また，La. 546-Br. 607 (21°) にも，同様のものが存する——≪真のユダヤ人と真のキリスト者とが常に待望してきたのは，彼らをして神を愛せしめるメシア，その愛

によって敵に打ち勝たしめるメシアであった。≫ (ロ)La. 554 は，次の叙述によって終っている——≪ユダヤ人は，それにもかかわらず，民族として常に存続する。『エレミア書』三一章三六節。≫（強調点は論者)。——以上(イ)，(ロ)の事実により，La. 554 は 21°≪永続性≫に所属する。

(267)——La. 555-Br. 619 について。この fr. は，21° ≪永続性≫の章にぞくする。なぜなら，第一に，この fr. はユダヤ人の律法の永続性を，その要旨の一つとしているから——≪彼ら〔ユダヤ人たち〕が神から受けたと誇っている律法を見て，私はそれがすばらしいものであるのを認める。それはあらゆる律法のうち最初のものであり，しかもギリシヤ人のあいだに法律という語が通用する約千年も前に，彼らに受け入れられ，絶えず守られてきたものである。≫

第二の理由は，この fr. は La. 552-Br. 620 と，その内容の重要点で一致していることである。両者はともに，ユダヤ民族がすぐれた特異性を持っていることを，指摘しており，かつ，その律法の永続性を説いている——≪……そういうわけで，それ〔律法〕がこのように反逆的ないらだたしい民族によって幾世紀にもわたり絶えず保持されてきたということは，全く驚くべきことである。≫（強調点は論者)。ところで La. 552 は 21° に属するから（261 参照)，La. 555 も 21° に所属することになる。

(268)——La. 556-Br. 618 について。(261) 参照のこと。

(269)——La. 557-Br. 630 について。(261) 参照。

(270)——La. 558-Br. . 591 について。この fr. は，図のみであるが，≪マホメット≫および≪異教徒≫なる語の中間に≪イエス・キリスト≫の文字が置かれ，この三者の下に神についての無知が，置かれている。したがって，この図は，パスカルの異教徒ならびに無神論者に対する批判検討を踏まえた上での，キリスト教の優越した位置づけを物語るものであり，キリスト教への反対的立場にあるイデオロギーに対する結論的意味を，持ったものである。それゆえこの fr. は， 18°≪宗教の基礎と反論への回答≫の章中に属すべきものである。事実この章には，これに先行する諸章——15° bis ≪本性の堕落≫，16°≪他宗教の虚偽≫，17°≪愛すべき宗教≫ の諸内容を集約した諸断章が，見られる。すなわち，18° の La. 450-Br. 601 中には，≪マホメット教≫，≪ユダヤ教≫

等の≪異教≫にかんする批判が見出され，また La. 451-Br. 226 には，≪無神論者≫にかんする叙述が予定されている（この La. 415 は La. 12-Br. 195 の末尾と一致しており，後者は前者の詳述と見られる)。かようにして La. 558 の図は，その綜合的結論的意図を示すものとして，同様の意義をもった 18° 章と性格的一致を示すことにより，これが同章に属することは，明らかである。

(271)——La. 559-Br. 750 について。この fr. の全文は，次のごとくである——≪もしユダヤ人が全部イエス・キリストによって回心させられていたら，われわれ疑わしい証人しか持たなかったであろう。またもし彼らが絶滅されていたらわれわれは証人を全然持たなかったであろう。≫（強調点は論者)。ところで La. 641 は，メシアにかんする≪預言≫を要旨とするものであるから，24°≪預言≫の章に属すべきものである。したがって，この fr. と内容的に連関する La. 559 も，当然 24° 中に入る（294 参照)。

(272)——La. 560-Br. 766 について。(イ)——この断章末尾の≪それに先立つ者，それに続く者。≫とは，事実上イエス・キリストに先立つものとこの後につづく者とを，すなわちユダヤ民族，預言者たちとキリスト者たち，惨めなユダヤ人の存続とを，意味している。そうしてこれは，23° の La. 596-Br. 699 および La. 588-Br. 640 と，一致している——≪ユダヤ教の会堂はキリスト教会に先行し，ユダヤ人はキリスト者に先行した。≫(La. 596)，≪彼ら〔ユダヤ人〕はその悲惨にもかかわらず，常に存続しているということ。≫(La. 588)

(ロ)——23° の La. 598-Br. 600 の≪マホメットのしたことは，だれにでもできる。彼は奇跡も行わなかったし，預言もされなかったのだから。だが，イエス・キリストのされたことは，だれにもできない。≫（強調点は論者）におけるイエス・キリストの所業なるものを，La. 560 は詳しく述べている。すなわち，La. 598 (23°) と La. 560 は，内容上密なる連関を保持している。それゆえ La. 560 は，23° 章にぞくする。

(273)——La. 561-Br. 859 について。この fr. は，≪船の沈没しないことが保証されている≫場合と同様，≪教会≫はいかなる≪迫害≫にも耐えうることが，神によって≪保証≫されていること，すなわち教会の永続性を，骨子としている。したがって La. 561 は，21°≪永続性≫の章にぞくする。

(274)——La. 562-Br. 858 について。この fr. は，次のごとくである——≪教会の歴史は，本来，真理の歴史と呼ばれるべきものである。≫この叙述の内容は，その要旨において，21° 章中の La. 544-Br. 867 の ≪古代教会が誤りにおちいっていたら，教会は没落していたであろう。……教会は，古代教会から受けついだ伝承というすぐれた方針を常に持っている……≫と，一致している。なぜなら後者は，≪古代教会≫が≪誤りにおちいって≫いなかったこと，また陥らずに済む≪すぐれた方針≫を今日の≪教会≫が与えられていること，一言にしていえば，≪教会≫は古今を通じて誤りに陥らないでいられること，したがって教会の歴史は≪真理の歴史≫と称しうるものであることを，説いているからである。それゆえ La. 562 は 21° に所属する。

(275)——La. 563-Br. 612 について。この fr. は，神の契約を主旨とする『創世紀』(一七章) 中の引用句から成り立っている。そうしてわれわれは，La. 553-Br. 631 中にも，同様の主旨のものを発見する——≪……神はみずからのすべてのことばが永久に保存されることを望み，またその書物が彼らに対していつまでもあかしとして役立つために，契約の箱に〔納め〕られることを望んでおられる，……≫(強調点は論者)。かように，両断章が内容上連関しておることは，明らかである。ところで La. 553 は 21°≪永続性≫に所属するものであるから (261 参照)，La. 563 も 21° に属することになる。

(276)——La. 564-Br. 632 について。この fr. は，La. 565-Br. 633 と連関している。なぜなら，(イ)——前者は ≪エズラについて。≫ Sur Esdras. なる小見出しを有し，後者は≪エズラの話を反駁する。≫Contre la fable d'Esdras. なる小見出しを有しているからである。(ロ)——また，La. 564 も La. 565 も，ともに聖書の≪再編≫ rétablir, rétablissement について触れている。ところで La. 565 中の≪……彼ら〔ユダヤ人〕が律法を持っていた可能性は十分ある。≫という叙述は，エズラの所言を否定し，ユダヤ律法の永続性を証示せんとするものであるから，両断章は 21°≪永続性≫の章中にぞくする。

(277)——La. 565-Br. 633 について。直前の (276) を参照のこと。

(278)——La. 566-Br. 634 について。この fr. も，21° にぞくする。なぜなら，この断章の最後の部分では，≪……したがってこのような摂理によって，

われわれの宗教は常に存続する。≫（強調点は論者）と，述べられているからである。

(279)——La. 600-Br. 740 について。この fr. の主旨は，イエス・キリストが旧約および新約の≪中心≫ centre である，というにある。ところで，23° ≪イエス・キリストの証拠≫Preuves de Jésus-Christ の章中にぞくする La. 592-Br. 752 中には，次の叙述が存する——≪彼〔ダビテ〕に，もし虚栄心があったなら，自分はメシアであると言いさえすればよかった。彼に関する預言は，イエス・キリストに関するものより明白であるから。／聖ヨハネについても同様であった。≫ この断章が言わんとするところは，ダビテがメシアであると自己主張しなかったということ，言い換えれば，ダビテは結果的にイエス・キリストがメシアであるように行動したということである——神の摂理によって。このことは，ヨハネについても，言えることである。而してダビテ，聖ヨハネは，それぞれ旧約・新旧中の人物であるから，両聖書がイエス・キリストが中心となるように構成されておると，言いうる。かように，La. 592 の主旨と La. 600 のそれとは，一致するので，後者は La. 592 と同様，23° 章にぞくすべきものである。

(280)——La. 601-Br. 546 について。この fr. は，≪本性は堕落している。≫ La nature est corrompue. なる見出しを有しているので，同名の章 15° bis に属する。

(281)——La. 602-Br. 548 について。この fr. の冒頭は，次のようである——≪われわれは，ただイエス・キリストによってのみ神を知る……≫。これは，14° 章中の La. 380-Br. 547 の≪われわれはイエス・キリストによってのみ神を知る。この仲保者がなければ，神との交わりはすべて取り去られる。≫ および La. 382-Br. 549 中の≪イエス・キリストなしに神を知ることは，たんに不可能であるだけでなく，また徒労である。≫ と，正しく一致している。したがって，La. 602 は 14° にぞくする。

(282)——La. 603-Br. 714 について。この fr. は，次のごとくである——≪神の証人であるユダヤ人。……≫。この内容は，23° 中の La. 588-Br. 640 と一致を示している——≪……このユダヤ民族がすでに長い年月のあいだ，し

かも常に悲惨な状態で存続しているということ，イエス・キリストの証拠として必要なので，彼らはイエスキリストを証明するために存続する……≫。それゆえ La. 603 は，23° 章に所属のものである。

(283)——La. 604-Br. 641 について。この fr. の冒頭は，≪彼ら〔ユダヤ人〕がメシアの証人として役立つために特につくられた民族であるということは，明白である……。≫ となっているので，直前の La. 603 の場合と同様，23° にぞくする。なお同じ理由によって，La. 655-Br. 760 も，23°章にぞくするものと，言いうる。La. 655 中には，次の叙述が存する——≪……この拒否によって，彼ら〔ユダヤ人〕は非の打ちどころのない証人となっただけでなく，さらにそれによって預言を成就させたのである。≫

(284)——La. 605-Br. 792 について。(イ)——この fr. 中には，≪すべてこの光輝は，彼をわれわれに知らせるために役立つにすぎない。≫ という叙述が見られるが，この文中の≪彼を≫ le とは「イエス・キリスト」を意味するのであるから，文意は，≪この光輝≫ cet éclat なるものがイエス・キリストの証したることを，指すことになる。したがってこの fr. は，23° ≪イエス・キリストの証拠≫に属する。(ロ)——次に，La. 605 中の上掲（イ）の引用文の内容は，23° 中の La. 585-Br. 793 の≪……彼〔イエス・キリスト〕は彼の秩序にふさわしい光輝 l'éclat をもって，そこに来られたのだ。≫ と，主旨において一致している。したがってこの点においても，La. 605 は 23° 章にぞくする。

(285)——La. 606-Br. 700 について。この fr. 中に述べられた信仰にもとづく歴史観は，23°中の La. 594-Br. 701 に見られる歴史観と同一のものである。それゆえ，La. 606 は 23° 章にぞくする。

(286)——La. 607-Br. 784 について。≪イエス・キリストは，……ただ神とバプテスマのヨハネとの証言をお望みになった。≫ というこの fr. の内容から言って，当然 23°≪イエス・キリストの証拠≫の章にぞくする。

(287)———La. 608-Br. 768 について。この fr. の冒頭句たる≪ヨセフによって表徴されたイエス・キリスト。≫ は，ヨセフがイエス・キリストの救済主たることを＜象徴的に示すもの＞，即ち一種の≪証し≫ preuve たることを，

意味するものであるから，この断章は23°章に所属する。

(288)——La. 609-Br. 440 について。この fr. は≪理性の腐敗≫ la corruption de la raison と≪真理≫ la vérité（イエス・キリストを指す）との関係を述べたものであり，これは 15° bis に属する La. 601-Br. 546（280 参照）と，内容的に一致している。したがって La. 609 も，15° bis ≪本性は堕落している≫の章に入る。

(289)——La. 610-Br. 788 について。この fr. は，21°≪永続性≫ の章中にぞくすべきものである。その理由は，次のごとくである。(イ)——この fr. 中の≪「われ七千人を遺せり。」≫は，『列王紀略上』19章18節の「われわがためにイスラエルの中に七千人を遺さん。皆その膝をバアルに跼めずその口をこれにつけざる者なり。」に由来するものである。そうしてこの章句は，イスラエルの王アハブの時預言者たちは殺され，祭壇は毀されて，一人残った自分さえ生命が危いと，エリアが神エホバに訴えた時に，神がエリアに対して告げた言葉である。したがってこの章句の主旨は，ユダヤ民族の宗教の存続のための神の保護ということであり，これは21°中の La. 540-Br. 613 の≪……この常に存続した宗教が常に攻撃されてきたということは，驚くべき，無比な，全く神聖なことである。それは幾千回となく，全般的破壊に近づいた。しかし，そのような状態におかれるつど，神はその力の異常な発動によって，それを復興されたのである。≫とその主旨を等しくしている。

(ロ)——また，La. 610 の≪七千人≫なるものは，21° 中の La. 548-Br. 608 の末尾における≪ユダヤ人には二種あった。一つは，異教的感情しか持たなかったが，他は，キリスト教的感情を持っていた。≫ という叙述のうちの，≪キリスト教的感情を持った≫ユダヤ人たちに相当する——パスカルの立場から見て。それゆえ，以上（イ，ロ）によって，La. 610 は21°章に属するものであることは，明らかである。

(290)——La. 611-Br. 787 について。この fr. のタイトルは，次のごとくである——≪ヨセフもタキトウスも，その他の歴史家たちも，イエス・キリストのことを語らなかったことについて。≫ ところで，このタイトルの要旨は，23° 章の La. 577-Br. 786 の冒頭と一致している——≪イエス・キリストの微

賤（この世で微賤と呼ぶ意味での）は，国家の重大事しか記録しない歴史家たちがほとんど彼を認めなかったほどのものであった。≫ それゆえ，La. 611 は 23° にぞくする。

(291)——La. 612-612-Br. 179 について。この fr. は，23° 章にぞくする。なぜなら，この断章に述べられている≪ヘロデ≫ Hérode の事柄は，23° 中の La. 594-Br. 701，La. 606-Br. 700 においても，触れられているから。

(292)——La. 613-Br. 759 について。この fr. は，パスカルの手によって，rayer されているので，これを除く。

(293)——La. 640-Br. 707 について。この fr. の内容は，次のごとくである——≪しかし，預言があるというだけでは十分でなかった。それがいたるところに分布され，すべての時代に保持されなければならなかった。／そうして，その成就が，偶然のしわざであると思われないために，そのことが預言される必要があった。≫ ところで 18° 章の La. 430-Br. 570 には，次の叙述が見られる——≪「基礎」の章に，「表徴」の章にある表徴の理由に関するものを付け加えなければならない。イエス・キリストがその最初の来臨を預言された理由。……≫（強調点は論者）この断章中の≪理由≫なるものこそ，前掲の La. 640 において見出されるところのものである。それゆえ，La. 640 は 18° ≪宗教の基礎と反論への回答≫の章中に編入されるべきものである。

(294)——La. 641-Br. 749 について。この断章は，24° 章に所属するものである。なぜと言って，この fr. は≪預言≫にかんするものであるから。ところでこの fr. の冒頭は，次の如くであって，La. 559 と連関している——≪「もしこのことがそんなにはっきりユダヤ人に預言されていたとしたら，どうして彼らはそれを信じなかったのであろうか。また彼らはそんなにはっきりした事実を拒んで，どうして絶滅されなかったのであろうか」≫。

(295)—— La. 642-Br. 783 について。この fr. は，24° 章に属する。（イ）——文中に，≪なかでも，地の王たちは，すでに預言されているように，…≫（強調点は論者）なる叙述があること。（ロ）——これにつづく文章の最後に，カッコつきの叙述が来るが，その冒頭には，≪預言≫の語があり，これに相当する聖書の章句が引用されていること。（ハ）——この fr. の末尾に，≪そして，

これらはみな，それを預言した力によってなされたのである。≫（強調点は論者）と，あること。——以上三点が，結論に到る理由である。

(296)——La. 643-Br. 717 について。この fr. は，パスカル自身によって抹消されているので，略する。

(297)——La. 644-Br. 713 bis について。この fr. は，その内容がすべて聖書中の預言にかんする引用句より成っているので，当然 24°≪預言≫の章に入る。

(298)——La. 645-Br. 739 について。この fr. の内容は，イエス・キリストの証拠を示すものであり，かつこの断章の叙述は，23° 章中の La. 596-Br. 699 のそれと一致している——イエス・キリストが預言者たちによって預言されたという点において。したがって，La. 645 は 23°≪イエス・キリストの証拠≫の章中にぞくする。

(299)——La. 646-Br. 711 について。この fr. は，24° にぞくする。なぜなら，見出しが≪預言≫なる語を含むとともに，断章全体が預言にかんするものであるから。

(300)——La. 647-Br. 727 について。この fr. の内容はすべて預言にかんするものであるから，24° に属する。

(301)——La. 648-Br. 714 について。この fr. の小見出しは，≪成就した預言≫ Prophéties accomplies. となっているので，当然 24° 章に入る。

(302)——La. 649-Br. 714 について。この fr. も，小見出しが≪預言≫となっているので，24° にぞくする。

(303)——La. 650-Br. 714 について。この fr. は，19°≪象徴としての律法≫ Loi figurative の章にぞくする。その理由は，次のごとくである。この断章における≪彼ら≫とは，ユダヤ人たちを意味し，そうして，≪彼らの邪欲を喜ばせ，その充足を望ませることによって。≫ なる叙述は，La. 525-Br. 664 中のものと本質的に連関している——≪神は，ユダヤ人をイエス・キリストに仕えさせるために，彼らの邪欲を利用された。≫ ところで，この La. 525 は 19° 章にぞくするから（250 参照），La. 650 も同章に属するものと，言いうる。

(304)——La. 651-Br. 721 について。この fr. は，次の聖書からの引用句

(『ヨハネ福音書』19・15) に尽きる——≪「カエサルのほか，私たちに王はない」≫。この引用句は，24°≪預言≫中の La. 631-Br. 720 の冒頭にも，掲げられている。これに次いで，パスカルは，同断章中で，≪だから，イエス・キリストはメシアであったのだ。なぜなら，彼らはもはや他国人しか王として戴かず，ほかの王を望んでもいなかったから。≫と書いている。それゆえ，La. 651 の言葉は，イエスがメシアであったことを，証するものである（パスカルの立場から見て)。したがって，La. 651 は，23°≪イエス・キリストの証拠≫の章に属する。

(305)——La. 652-Br. 715 について。この fr. は，≪預言≫という小見出しを持っているので，同名の章——24° 章にぞくする。

(306)——La. 653-Br. 778 について。この fr. は 19° 章≪象徴としての律法≫にぞくすると，見られる。なぜなら，この断章の主旨は，聖書の章句の意味が文字通りではなく，象〔表〕徴的意味に解されるべきであるというに，在るからである。ところで 19° 章中には，聖書を象徴的に解釈すべきであるという主旨の断章が，少くない。特に，La. 486-Br. 648 の≪二つの終り。一，すべてを定義的に解すること。二，すべてを精神的に解すること。≫は，La. 653 と密接に連関し，内容上後者は前者の実例と見られる。なぜなら，La. 653 の聖句——≪「ユダヤ全国とエルサレムの全住民とがみなバプテスマを受けた」≫(強調点は論者）は，文字通りに解すれば，事実上ありえないことである。しかし，これは文字通り解すべきではなく，≪あらゆる身分の人々が，そこに集まった≫という意味に解すべきである，というのがパスカルの言わんとするところ，と思われる。≪あらゆる身分の人々が，そこに集まったからである。≫ A causes de toutes les conditions d'hommes qui y venaient. というパスカル自身の解説が，これを裏書している。次に，La. 653 の後半の叙述は，パスカルが『マタイ伝』3章9節にもとづいて書いたものであるが，これも文字通りに意味と精神的意味（象徴としての意味）との二義を含意していることの，例示と考えられる。それゆえ，La. 653 は 19° に所属すると，判定しうる。

(307)——La. 654-Br. 704 について。この fr. は，18°≪宗教の基礎と反論への回答≫中に属するものである。その理由は，以下のごとくである。——(a)

この fr. は 23°≪イエス・キリストの証拠≫中の La. 594-Br. 701 と連関している。すなわち La. 654 の前半および後半は，それぞれ La. 594 の前半，後半に照応一致している。特に，この両断章の各後半の関係について言えば，La. 594 中の≪ローマ人≫ les Romains としては，二種類の人たちが考えられる。すなわち歴史的事実から見て，キリスト教に改宗したローマ人（≪異邦人≫の一部）と，キリスト教徒を迫害したローマ人（非キリスト教徒）との，二種類が考えられるのである。而してキリスト教徒としてのローマ人は，ユダヤ民族を非難する立場に立ったと見られ（なぜならユダヤ人はイエス・キリストを見誤り，これを刑死せしめたからである），またキリスト教徒がローマ人によって迫害されたことは，著名な事実であるから，La. 594 の≪ローマ人≫なるものは，La. 654 の後半に見られる≪異邦人から，あざけられたユダヤ民族，迫害されたキリスト教徒。≫と，少くとも部分的に連関することになり，前記の二断章（La. 654, La. 594）の照応一致は，内容上これを認めうるのである。それゆえわれわれは，La. 654 が La. 594 の所属する 23° 章すなわち≪イエス・キリストの証拠≫の章と連関していることが，分る。——(b) 次に，La. 654 は 24°章 La. 614-Br. 773, La. 648-Br. 714, La. 649-Br. 714 と，関係を有している。すなわち，24°≪預言≫の章と連関しておる。詳言すれば，La. 654 の前半および≪異邦人からあざけられたユダヤ民族，迫害されたキリスト教徒。≫なる叙述は，それぞれ La. 648 および La. 649 の各要旨と，一致している。また La. 614 の後半（特にキリスト教徒迫害の部分）は，La. 654 の最後の部分である≪迫害されたキリスト教徒。≫と，主旨の上で合致している。それゆえ La. 654 は 24°≪預言≫の章とも連関していることが，知られるのである。——(c) 玆で留意すべきことは，La. 654 は上述の諸断章（La. 594; La. 614, La. 648, La. 649——289, 290 参照）に比べて，叙述が簡略であり，抽象的であるということである。言い換えれば，これら諸断章の方が，La. 654 の叙述より内容的に詳細であり，かつ具体的であるということである。したがって La. 654 は，これら諸断章のぞくする二章（≪イエス・キリストの証拠≫および≪預言≫の両章）に，敢えて新たに附加する必要のないものである。このことは，パスカルの意図する叙述形式（この場合は略述——→詳記，ないし抽象的——→具

体的という表現形式）——≪漸層法≫ gradation の形式を顧るとき，La. 654 がこれに二章以前の章に属すべきものであるあることを，意味するものである——(d) 以上（a. b. c）により，La. 654 の内容的特性は，（イ）この fr. がイエス・キリストの来臨の前後二期の出来事を叙していること，（ロ）≪イエスキリストの証拠≫に関係があること，（ハ）≪預言≫連関していること，の三者である。——(e) かようにして La. 654 は，この三性格を有する fr. と連関し，かつこの fr. を含む≪章≫に属することが，推定される。ところで，かかる fr. を，われわれはまさに 18° 中の La. 447-Br. 705 に見出す≪証拠。／預言とその成就。／イエス・キリスト以前のものと以後のもの。≫（強調点は論者）したがって La 654 は，La. 447 を含む 18° ≪宗教の基礎（土台）と反論への回答≫の章中にぞくするものと，判定しうる。

(308)——La. 655-Br. 760 について。この fr. の冒頭は，≪ユダヤ人は彼〔イエス〕を拒むが，全部が拒むのではない。聖徒は彼を受け，肉的な人々は拒むのである。≫となっており，またこの fr. の末尾は，≪……の拒否によって彼らは非の打ちどころのない証人となっただけでなく，さらにそれによって預言を成就させたのである。≫となっている。而してこの叙述は，24°≪預言≫中の La. 622-Br. 748 の内容と一致している——≪メシアの時代に民は相分かれる。／霊的な人々はメシアを受け入れたが，俗物どもは受け入れずにメシアの目撃者として役立った。≫ したがってこの一致により，La. 655 は 24° 章中のものであることが，分る。

(309)——La. 656-Br. 736 について。この fr. は，≪預言≫ Prophéties なる小見出しを有するので，24°≪預言≫の章にぞくする。

(310)——La. 657-Br. 731 について。この fr. も，24° 章に所属する。理由は，(309) と同様。

(311)——La. 658-Br. 568 について。この fr. の書出しは，≪福音書のうちに引用された預言は，……≫ Les prophéties citées dans l'Evangile. ……となっているので，内容上 24° 章にぞくする。

(312)——La. 659-Br. 712 について。この断章は，24° 章に属するものである。なぜなら，断章内容が≪預言≫の分類に関するものであるから。

(313)——La. 660-Br. 698 について。この fr. は，次のごとく始まる——≪預言された事柄が起こるのを見て，はじめて人は預言を理解する。≫この叙述に徴して，われわれはこの断章が≪預言≫とその≪証拠≫ les épreuves にかんするものであることが，分る。また，この fr. の残余の叙述は，特に象徴的意義を有する証拠と，これを理解しうる条件——≪内的≫ intérieur 態度とについて触れている。したがって全体として，この fr. は預言を核心とするものと言いうるから，24° 章にぞくする。

(314)——La. 661-Br. 726 について。この断章の小見出しは，≪預言≫ Prophéties となっているので，当然 24° にぞくする。

(315)——La. 662-Br. 722 について。この fr. は，『ダニエル書』の預言にかんするものであるから，24° 章に属する。

(316)——La. 663-Br. 761 について。(イ)——この fr. は，イエスにかんする≪メシアの決定的な証拠≫と≪預言≫を成就させたことに関連するものであるが，(ロ)——次に，23°≪イエス・キリストの証拠≫中の La. 589-Br. 697——≪「あらかじめ告げられたことを読め」／「成し遂げられたことを見よ」／「成し遂げられるべきことを思え」≫と密接に関連し，かつこれを補足している。したがって La. 663 は，23° 章にぞくする。

(317)——La. 664-Br. 713 について。この fr. は，24°≪預言≫の章にぞくする。その理由は，以下のごとくである。(イ)——この断章は六つの部分に分れ，それぞれ≪ユダヤ人の無期捕囚。≫ Captivité des Juifs sans retour, ≪表〔象〕徴≫Figures, ≪預言。神性の証拠。≫Prophéties. Preuves de divinité, ≪クロスについての預言≫ Prédiction de Cyrus, ≪ユダヤ人の排斥と異邦人の回心≫ Réprobation des Juifs et conversion des Gentils, ≪『エレミヤ書』七章。神殿の排斥。≫ Jér., V11. Réprobation du temple の小見出しを持っているが，これらはすべて内容上，預言にかんするものに外ならない。(ロ)——≪表徴≫の見出しを持つ叙述も，一見 19°≪象〔表〕徴としての律法≫の章に属すべきもののように見えるが，内容を検討すれば，これが預言を根本主旨としていることが，分る。例えば，この叙述の終り近くの部分は，次のようである——≪「主は私に言われる，この民は唇をもって私を敬うけれども，その

心は私に遠ざかっている。（これが理由であり原因である。彼らがもし心から神を敬っていたら，預言を悟ったであろう）……」≫　この引用文中のカッコ内の≪預言≫なる語は，われわれの判定を裏附けるものである。また，例えば，『イザヤ書』8章中の≪……主はあなたの聖所となられるであろう。しかし，イスラエルの二つの家には，つまずく石，妨げの岩となるであろう。／エルサレムの民には，罠となり，滅びとなるであろう。彼らのうち多くのものは，この石につまずき，倒れ，傷つき，罠に捕えられ，かつ滅びるであろう。……≫は，明らかに預言そのものを述べており，≪表〔象〕徴≫のタイトルにもかかわらず，その他の部分の叙述も預言にかんするものが，大部分を占めている。

(318)——La. 693-Br. 535 について。この fr. は，われわれに≪欠点を指摘してくれる人々≫に≪感謝≫すべきであること，およびその理由にかんするものである。普通われわれは，他人に欠点を指摘されることを，不愉快に感ずるものであるが，これは良くない。なぜなら，他人たちは≪われわれを鍛えてくれる≫し，≪矯正〔欠点の〕の実行と，ある欠点からの脱出とを用意してくれる。≫からである——かくのごときが，キリスト教徒としての心得であるべきであるというのが，パスカルのこの断章における主旨とおもわれる。したがって，この fr. (La. 693) は，26° ≪キリスト教の道徳≫の章にぞくする。

(319)——La. 694-Br. 500 について。この fr. は，次のごとき短いものである——≪善と悪という二語の理解。≫ (L'intelligence des mots de bien et de mal.)　この断章中の《intelligence》なる語は，古辞典に拠れば，〈bonne entente〉(G. Cayrou, Le français classique, 1948, p. 498) の意味であり，〈bonne〉は〈vrai, naturel〉(ibid., p. 94) の意義を有していた。したがって〈bonne entente〉とは，「真の理解」ないし「自然な理解」という意味になり，La. 694 の≪善と悪という二語の理解。≫とは，パスカルの意図からすれば，「善悪なる語についてのキリスト教的立場からする自然な理解ないし真の理解」という意味を含意していたはずである。而してキリスト教の立場からするかかる理解なるものは，当然キリスト教の道徳観に関係するものであるから，この fr. (La. 694) は 26° 章にぞくする。

(320)——La. 695-Br. 579 について。この fr. の主旨は，後半の≪同様に，

神は道徳のうちに愛を与え，それが邪欲に敵して実を結ぶようにされた。≫ に存するが，この叙述は明らかに≪神≫と≪道徳≫ la morale との関係に触れているので，この断章は 26°≪キリスト教の道徳≫に属する。

(321)——La. 696-Br. 458 について。(イ)——La. 696 と La. 720-Br. 459, および La. 721-Br. 460 の三断章は，内容上相互に連関しあっている。すなわち，これらは世俗的欲望と神によって救われた者の状態とを叙している点で，相互に関係を有している。つまり，≪肉の欲，目の欲，誇り≫ を説く点で，La. 696 と La. 721 は共通し，また神の力によって，≪エルサレムの城門≫に立ちあがる人々の様を説く点で，La. 696 と La. 720 は共通性を持っている。(ロ)——ところで，世俗的欲望を抱いている状態から，神によって救われた状態へと移行せしめるものは，何か。これを明らかに示すものは，26° 中の La. 689-Br. 476 と未分類断章（N. c.）の La. 698-Br. 779 とである——≪神のみを愛し，自分だけを憎むべきである。≫ (La. 689)，≪もし人が回心するならば，神は癒し，かつゆるされるであろう。≫ (La. 698) かように，自己否定と神への愛とが，叙上の移行をもたらすのである。したがって，内容の上から観るとき，上掲の五個の断章——La. 696, La. 720, La. 721, La. 693, La. 689——は，すべて倫理的必然関係を保ちながら，一個のグループを形成しているのである。(ハ)——而して La. 689 は 26° 章中のものであるから，既出の諸断章は一切同章に所属するものと，判定しうるのである。

(322)——La. 697-Br. 515 について。この fr. は，キリスト教道徳の立場から，≪神に選ばれた者≫ les élus と ≪神に見捨てられた者≫ les réprouvés とについて，批判的に述べているので，26° に属する。

(323)——La. 698-Br. 779 について。(321) を参照のこと。

(324)——La. 699-Br. 485 について。この fr. の冒頭は，次のごとく始まる——≪真の唯一の徳は，それゆえに，自分を憎むこと（なぜなら，人はその邪欲のゆえに憎むべきものであるから）と，真に愛すべき存在を愛するために，それを求めることである。≫ ところで，これと要旨において一致する断章が，26° 中の La. 689-Br. 476 見出される，すなわち≪神のみを愛し，自分だけを憎むべきである。≫ が，これである。La. 699 の≪真に愛すべき存在≫ un être

véritablement aimable とは，パスカルの見地からみて，≪神≫を意味することは当然であるから，両断章中の叙述は一致しておると，言いうるのである。それゆえ，La. 699 は La. 689 所属の章たる 26° にぞくするものと推定しうる。

(325)——La. 700-Br. 534 について。この fr. は，26° 章にぞくする。なぜなら，この断章の内容は，パスカルのキリスト教的倫理の立場から見た≪二種の人々≫ deux sortes d'hommes——≪義人≫ justes と≪罪びと≫ pécheurs とに，かんするものだからである。

(326)——La. 701-Br. 502 について。この fr. は，≪徳≫ vertus としての≪支配された情念≫ passions dominées について，すなわち情念を適当に使役すべきものであるという主旨に就いて述べているので，26° ≪キリスト教の道徳≫ の章にぞくする。

(327)——La. 702-Br. 495 について。この fr. は，次のごとくである——≪人の何であるかを探求しないで生きることが，とてつもない盲目であるとするならば，神を信じながら en croyant Dieu 悪い生活をすることは，恐るべき盲目である。≫ は，一応形式的に神を信ずる者——クリスチャンを対象として，述べられている。だが，パスカルの言わんとするところは，形式的ないし世俗的な意味でキリスト教徒たることでは，信仰の立場から見て，不十分であり，≪悪い生活≫なるものを反省し，≪神のみを愛し，自己だけを憎むべきである。≫ というにあると，考えられる。

以上を通じて，次の二点が明らかとなる——(イ) この断章は，世俗的なキリスト教徒のあり方について述べたものであること。(ロ) この断章の真意は，≪神のみを愛し，云々≫ (26° 中の La. 689-Br. 476) と結びつくものであること。したがってこの fr. ——La. 702 は，26° ≪キリスト教の道徳≫の章中のものと，判断しうる。

(328)——La. 703-Br. 159 について。この fr. の主旨は，≪隠れた美しい行為≫ les belles actions cachées，すなわちキリスト教道徳の徳目たるべきものの尊重を説くにあるから，26° 章にぞくすることは，自明の理である。

(329)——La. 704-Br. 911 について。この fr. は，叙述内容そのものから言って，26° 中のものである。特に，≪「善をもって悪に勝て」≫なる聖書の『ロ

ーマ人への手紙』12 の 21 よりの引用句は，パスカルの抱懐するキリスト教倫理の立場を示している。

(330)——La. 705-Br. 906 について。この断章の要旨は，キリスト教道徳の立場から見た世俗生活と信仰生活との関係を説くことにあるから，26° 章にぞくする。

(331)——La. 706-Br. 383 について。この fr. および La. 707-Br. 382 は，26° 章にぞくする。なぜなら，両断章は道徳的判断の規準を，運動体に対する≪固定点≫ un point fixe として，比喩的に述べているが，これはパスカルにとっては，キリスト教の倫理的立場以外のなにものでもないからである。

(332)——La. 707-Br. 382 について。この fr. の全文は，次のようである——≪すべてが，一様に動くときには，船の中のように，見たところ何も動かない。みなが放縦のほうへ向かって行くときには，だれもそちらに向かって行くようには見えない。立ち止まった者が，固定点の役割をして，他人たちの行き過ぎを認めさせる。≫ この断章は，不道徳にかんする多数の人間の心理的無自覚（現象）と，その原因（理由）とを，物理現象の例を引いて説明するものであるから，5°≪現象の理由≫の章に入る。なおこの fr. は，内容上直前の La. 706 と極めて近い類似を示しているが，両断章はわれわれ自身によって，異った章中に配属せしめられている。これは，パスカルの分類配置の傾向に沿ったものである（詳論は後日の XVIII 回に譲る）。

(333)——La. 708-Br. 507 について。この fr. は，≪恩恵。恩恵のはたらき，かたくなな心，外的事情。≫ という短断章であるが，≪外的事情≫ les circonstances exetérieures なるものは，しばしば神の摂理のあらわれであり，恩恵の授与・非授与・罰等の契機となりうる。而してこの≪外的事情≫と密なる内面的関係にあるものは，≪かたくなな心≫ la dureté de coeur の有無であり，≪恩恵のはたらき≫ les mouvements de grâce も，これに応ずると，考えられる。しかしこの断章 La. 708 にあっては，この間の消息は直接には触れられておらない。簡単乍ら，これに触れているものは，26° の La. 670-Br. 524 である——≪人間は絶望と高慢との二重の危険に常に，さらされているので恩恵を受けることも失うこともあるという，彼の二重の可能性を教える教理

ほど，人間にとって適切な教理はない。≫ この断章中の≪絶望ないし高慢≫ désespoir ou orgueil なるものは，パスカルの宗教的立場からすれば，前出の≪かなくな心≫の二形態にほかならないから，この La. 670 と La. 708とは，内容上不可分離の関係にあると，言いうる。それゆえ，La. 708 は La. 670 ともども，26° 章に属する。

(334)——La. 709-Br. 923 について。この fr. は，≪悔俊の秘跡≫ le sacrement de pénitence と≪悔悟≫ la contrition との関係を述べているので，内容上当然 26° にぞくする。

(335)——La. 710-Br. 912 について。(イ)——この fr. は，≪一般的。／道徳と言語とは，特殊的であるが，一般的な学問である。≫ という短いものであるが，パスカルの真意は，≪道徳と言語≫ morale et langage が≪一般的≫ universelles であること，すなわち，両者はともに普遍的，客観的なものであり，而して≪道徳≫の客観性一般性なるものあるいは客観的普遍的の道徳なるものは，キリスト教的真理に基づくと言うにあると，おもわれる。なぜならパスカルは，La. 380-Br. 547 中で，≪……なくてはならない仲保者なしに，人は神を絶対に証明することも，正しい教理と正しい道徳とを教えることもできない。けれどもイエスキリストにより，イエス・キリストにおいて，人は神を証明し，道徳と教理とを教える。≫（強調点は論者）と，述べているからである。かように La. 710 は，内容上，キリスト教道徳と根本的に係わっているので，26° 章に属するものと，言える。

(ロ)——次にこの fr. は，La. 694-Br. 500 の≪善と悪という語 des mots の理解。≫と関係をもつと，考えられる。善悪にかんする真の≪理解≫が成り立つためには，善悪そのものがキリスト教倫理を規準として，客観的なものでなければならず，またこれらを表現する≪言語≫なるものも，客観的普遍的でなければならないからであり，また事実そうでありうるからである。ところでこの断章 La. 694 は，既述のごとく 26° 章にぞくするから (319 参照)，これと連関する La. 710 も同章にぞくすると，言いうる。

(336)——La. 711-Br. 352 について。この断章は，≪一人の人間の徳≫ la vertu d'un homme の評価の仕方について述べているので，当然 26° に所属

する。

(337)——La. 712-Br. 501 について。この fr. の内容は，次のごとくである——≪第一段，悪を行なって叱られ，善を行なってほめられること。／第二段，ほめられも叱られもしないこと。≫ かように，≪悪≫ mal および≪善≫ bien が述べられ，かつ行為に対する道徳的評価が語られているので，26° に属するものと，判定しうる。

(338)——La. 713-Br. 11 について。この fr. の主旨は，≪あらゆる大がかりな気ばらしは，キリスト者の生活にとっては危険である。≫ ということであり，≪演劇≫ la comédie——特に恋愛劇の危険性が，説かれている。つまり，≪キリスト者の生活≫ la vie chrétienne の道徳的内容と関係しているので，この fr. は 26° 章にぞくする。

(349)——La. 714-Br. 103 について。この fr. の主旨は，≪……偉人たちだって悪徳においては普通の人間と同じなのだ……≫という点に存する。つまり≪偉人たち≫も≪普通の人間≫も，言い換えれば，人間は一般に≪悪徳≫に陥り易いということである。これは，パスカルの立場からすれば，人間本性の堕落に根差すことであるから，La. 714 は 15° bis ≪本性は堕落している≫ La nature est corrompue の章に属する。

(340)——La. 715-Br. 497 について。この fr. は，≪神のあわれみをたのんで善行をなさず，放逸に過ごす人々に対して。≫ Contre ceux qui, sur la confiance de la miséricorde de Dieu, demeurent dans la nonchalance, sans faire de bonnes œuvres. というタイトルを持っているので，内容から言って，26° にぞくする。

(341)——La. 716-Br. 68 について。この fr. は，世人が≪真人間 (honnête homme) であることについて得意がる≫ことに就いて述べているが，La. 726-Br. 542 においては，≪人間を同時に「愛すべき幸福なもの」とするのは，キリスト教だけである。道義 (l'honnêteté) では，人は同時に愛すべき幸福なものとはなりえない。≫ことが，説かれている。パスカルが言わんとすることは，彼自身の宗教的立場を顧るとき，明らかである。すなわち，世人が貴しとする《honnête homme》のあり方を超えるものに，キリスト者的あり方が存すると

いうのが，彼の主旨にほかならない。かくして両断章は，相互に連関を有するのである。

ところで，La. 726 は，26° 中の La. 673-Br. 541 と，内容上関係を有している。なぜなら La. 673 は，次のごとく述べておるからである——≪真のキリスト者ほど幸福で，道理にかない，有徳で，愛すべきものは，ほかにない。≫ そうして，La. 726 も同様の主旨を説いているからである。かくして叙上の三断章——La. 716, La. 726, La. 673 の三者は，互いに連関しあっていることが，分るのである。而して La. 673 は 26° 中のものであるから，他の二断章も当然同章中のものと，推断しなければならない。

(342)——La. 717-Br. 447 について。この fr. は，≪正義≫・≪原罪≫・≪幸福≫・≪死≫の四者について述べているが，この四者を漏れなくすべて含んでいる章は，10°≪至福≫の章のみである。それゆえ，La. 717 は 10° にぞくする。

(343)——La. 718-Br. 673 について。(イ)——この fr. は，≪結婚≫ les mariages にかくするものであるから，当然キリスト教道徳の問題にぞくする。したがってこの fr. は，26° 中のものである。(ロ)——次にこの fr. は，以下のごとき内容のものである——≪聖パウロは，人々が結婚を禁じるであろうと，自分で言っていながら，コリント人に向っては，罠にでもかけるかのように，結婚するなと，自分で語っている。もしある預言者が前のように言い，あとで聖パウロが，後のように言ったならば，彼は非難されていたであろうからである。≫ この断章の最初の部分に出て来る≪人々≫ des gens なるものを，パウロは偽善者としている。したがって，≪結婚を禁ずる≫立場は，パウロから見て偽善的な立場である。にもかかわらず，パウロはコリン人に向っては，≪結婚するな≫と語っており，パウロの言葉には，外見上，矛盾が存することになる。しかしパスカルが，ここでパウロの言葉を利用して説かんとしていることは，「結婚を許すべきである」とする立場か，「結婚すべきでない」という立場かの，いずれかを採るべきであるとする二者択一的な形式主義を排すべきであるという点に，あるとおもわれる。形式主義に反対するパスカルの立場は，≪形式主義者でなく。≫ Point formalistes. なるタイトルを有する 26° の La.

683-Br. 672 において見出される。この fr. でパスカルは，形式的な≪割礼≫は必要でなく，≪聖霊≫を受けることが大事である旨を，述べている。要するに，パスカルはキリスト教的精神を規準とする立場に立つのであって，たんなる形式に執する立場は，これを排するのである。かかるパスカルのキリスト教的立場に立つ実質主義的見解は，次の結婚の意義にかんする La. 709-Br. 923 においても，これを見出しうる。この断章においては，≪……生殖行為において罪を妨げるものは，婚姻の祝福ではなくて，神に対して子供たちを生もうとする欲求である。≫（松浪訳）と述べられ，結婚という世俗的形式だけでは不十分である旨が示され，逆に結婚という形式が存せずとも，生殖行為が，≪純潔≫でありうる場合（ロトの娘たちの場合）を，説いている。かようにパスカルの結婚観は，宗教的精神を基本とするのであって，「結婚を禁ずる」・「禁じない」という形式上の採択の問題ではないのである。したがって La. 718 は，形式主義の超越を結婚問題に即して説いているのであって，前掲の La. 683, La. 709 とその根底を等しくするものである。それゆえ La. 718 は，La. 683 および La. 709（334 参照）と同じ章（26°）中に属すべきものと，言いうる。

(344)——La. 719-Br. 533 について。この fr. は，26° 章にぞくする。なぜなら，パスカルは，この断章中にパウロの言葉を引用して，≪キリスト者の性格≫ le caractère chrétien を倫理的に規定しており，また反キリスト者的性格についても，コルネイユの作品中の科白を引用して，述べているからである。

(345)——La. 720-Br. 459 について。これにかんしては，(321) を参照。

(346)——La. 721-Br. 460 について。(321) を参照のこと。

(347)——La. 722-Br. 250 について。この fr. の終りの部分と，26° 章中の La. 680-Br. 249 の内容とは，まったく一致しているので，前者は 26° にぞくする。

(348)——La. 723-Br. 104 について。この fr. は，≪自分の義務≫ notre devoir を思い出すべき方法について述べているが，これは内容上キリスト者の心得とも言うべきものを含んでいるから，26° 章に入る。

(349)——La. 724-Br. 518 について。この fr. は，27°≪結論≫ の章にぞく

する——(162) 参照。

(350)——La. 725-Br. 264 について。この断章の末尾には,≪第八の至福。≫ béatitude huitième という語があり，これがこの fr. の要旨を象徴しているので，この fr. は 10°≪至福≫の章にぞくする。

(351)——La. 726-Br. 542 について。この fr. は，26° に属する (341 参照)。

(352)——La. 733-Br. 848 について。この fr. は，27°≪結論≫ の章にぞくする (162 参照)。

(353)——La. 734-Br. 584 について。この fr. も，27° にぞくする (162 参照)。

(354)——La. 735-Br. 847 について。この fr. も，27° 章中のものである (162 参照)。

(355)——La. 736-Br. 564 について。この fr. も，27° 章に入る。(162) 参照のこと。 (XV 回了)